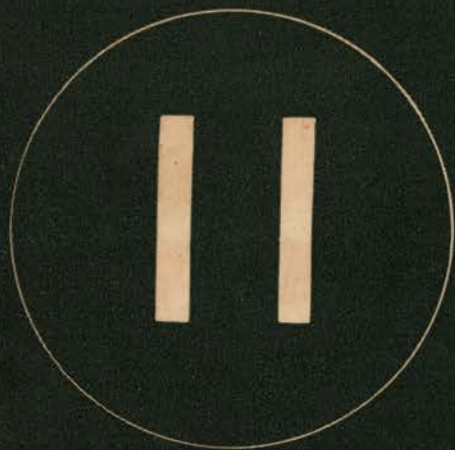


主 宰
★
麻 生 路 郎

川柳雅証

月刊



Pensoj flugas trans la land-limon

★最高權威の月刊柳誌

川柳雑誌 十二月號目次

表紙……(神官)……………福井 哲
川柳寫真……………大西 八歩
……………福井 哲

路郎雜筆……………麻生路郎 (一)

歴代天皇御追號讀法……………(二)

ユーモアを探る……………福富 雷童 (三)

黒服ビル……………戸田 孤蓬 (二)

柳ドイツ小史……………小畑自由期 (二)

愚談……………路郎・詰美・豆秋 (一)

川柳一ト筋……………伊志田孝三郎 (一)

川柳のこころ……………梅本 座山 (一)

武玉川四篇研究(III)……………森 東魚 (一)

參政權の無い日本人……………前山 北海 (一)

狸……………前田 五健 (一)

平理村雜記……………蛭子 省二 (一)

貝……………岡田 某人 (一)

川柳書架……………友郎・風竹・北海 (一)

布哇の川柳部隊……………友郎・風竹・北海 (一)

近作柳樹……………麻生路郎選 (一)

川柳……………麻生路郎選 (一)

同舟近詠……………諸 家 (一)

不朽洞句抄……………麻生路郎 (一)

一龍……………森 東魚選 (一)

各地柳壇……………前田 五健選 (一)

柳界展……………正本 水客選 (一)

川柳……………(一)

後……………(一)

社關係の人々……………(一)

★兵士は戦線に……………我等は銃後に!!

★戦線へ銃後を送る快著

本書は本誌に連載され名評論として好評々たりし「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇を合纂したるもの、評釋の輕妙さは日本柳壇に於ける著者の獨壇である敢て薦む

麻生路郎 著

新川柳評釋

★六版上質縮寫紙一〇四頁

★定價十八錢 六錢

★外他地の八十八錢 鮮明・潤澤・太厚・表吉

★發行所 堺市海邊通二丁八一番地

朽 洞

大替三〇三番二番

線戦への慰問には

柳誌・柳書

【川柳雑誌】と【新川柳評釋】が特によろこばれます!! 川柳雑誌社へ御申込みになります。代送いたします。

新刊・豫告

月刊紙に映じた人々

定價貳圓

大阪市會議員 庄健一 著

内容目次 人物月旦 (河上丈太郎・麻生久・菊川・鈴木孝勳代表・無産團十九名月旦・安井知事を迎へて・戯曲「加々美武夫」・關市長を追悼す・阪本三郎氏を用ふ・森下新助役・田萬清臣・中田政三・森戸辰男・内務本官を諷刺した安井英二・河野・山口孝勳代表を送る・職工代表土塚本重蔵・關・加々美市長の比較・瀧山良一・大島新一・加々美市長を用ふ・疑問の家主田中吉太郎・下村海南・忘れられない亡友・市田・野草・山内・津田信吾・上田孝吉・市賀列傳・満支を視察して歸つた坂間市長・四選した西尾代議士・安藤國松君の急逝・大森市議を用ふ・再選した坂間市長・附録 ユーモア自叙傳・亡き母の思ひ出・關一氏遺著「都市政策の理論と實際を讀む」・木津谷氏著「歐米管見」に就て・川柳五十章

紀元二六百年

擧つて參拜

伊勢大神宮

榎原神宮

敵傍御陵

參拜に御便利な
省社共通特殊乗車券

(本年中途發行)

伊勢大神宮	四・九〇	四・二〇	三・六〇
參拜	(小兒半額)	(小兒半額)	(小兒半額)
榎原神宮	一・一〇	二・〇〇	四・九〇
參拜	(小兒半額)	(小兒半額)	(小兒半額)

この外全國省縣及び縣廳各指定驛より伊勢大神宮、榎原神宮、御陵の省・社・縣共通特殊乗車券發行費 (詳細は最寄驛にて詢問合せ願ひます。)

大阪・參急電鐵

發行所

大阪市南區難波新地二番町二七

大阪興亞社

路郎雜筆

句會に對する 再認識

(一)

同じ趣味に生きる人達が一つの會場を集つて、句會を開くといふことは啓蒙、交驛、其の他利益が多々あるので、運座と稱して古くから行はれてゐることであるが、今日の句會は運座の範圍から、大は結社の宣傳機關とまで擴大されてゐる。

(二)

運座の範圍の句會即ち小集や一結社の例會程度のものに

は、それとしての特色があるし、一結社或は數社の合同的集會には多分に宣傳的、興行的な匂ひが濃厚に盛られてゐて、それとしての價值がありこれ等の大會にしても、同趣味者へ呼びかける宣傳と、趣味者以外の社會人へ呼びかける宣傳とがあつて、社によつて、その方針が決定されてゐる。従つて小集に重點を置く場合と人寄せ式、催物式大會に力點を置いてゐる社とは句の傾向に自づと開きが生じてゐる。

(三)

中には句會へ出席すると、自己の持つてゐる簡性をそこなはれて、オリヂナリテイのない句となり、句は知らず識らずマンネリズムなものになつてしまふから、句會へは餘り出席しない方がいゝといふ意見を持つてゐる作家を時々見かけるが、これは句會を單に句の製造工場として觀、選句工場であるとしての偏見であつて、句會の持つ特質といふものは、そんなに範圍の狭いものではない。

句會に出席する多くの作家は——いや總ての作家は未完成の作家なのである。未完成を完成に近づける道筋は幾つもあるであらうが、句會へ出席して所業されること、その一つであることに間違ひはないのである。

(四)

お互ひが、談合ふことによつて、意外な誤解であることを見出すことは尠なくないのであるから、斯うした會合を利用して、さうした誤解を氷解せしめること、又自己の思ひ及ばぬ方面の話を耳から識ることも、句會そのものが、決して輕視出來ないものであることの證左であらうと思ふ。

句會でする題詠吟などは自分の畠でない題に相當に出題されるものと見なければなら

ぬ。その時、他の作家たちがそれ等の課題を如何にこなすかを直接目撃すること、自己の作品と比較對照することを得る便宜だけでも大した收穫だと云へるであらう。

大體、他と接觸することによつて、自己の簡性が喪失する考へることは、大きな誤

不朽洞句抄

麻生路郎

歴史的算笥の底の丸帶よ

罪なのぞみも十月七日きりとなり

金銀糸着たきり雀もゐて悲し

姉さんがほんとの芳紀になる七日

丸帶に壽永の秋を思はされ

譯であつて、他と接觸することによつて、失はれるものは禮儀は嚴として存在することとに於て、失はれるものは忘れなくてはならぬ。近時、向真にその人の簡性なのである。ホントの簡性は、さう簡単に喪失するものではない。單に喪失するものではない。むしろ、他に接觸しない以前の自己の簡性と思考してゐるところの簡性は不純物の混交した簡性であると考へるのが正皓を得てゐるであらう。この意味からして句會は人間陶冶の趣味道場として大きな役割を持つものであることが知られる。

(五)

例會にして、大會にして

丸帶

大正十五年だつたか、三宅やす子さんを牛込に訪ねたことがあつた。その時、やす子さんは僕に「ウーマンカレント」といふ薄ッペラな雑誌を呉れた。いふまでもなく、その雑誌はやす子さん自身で編輯してゐたのである。

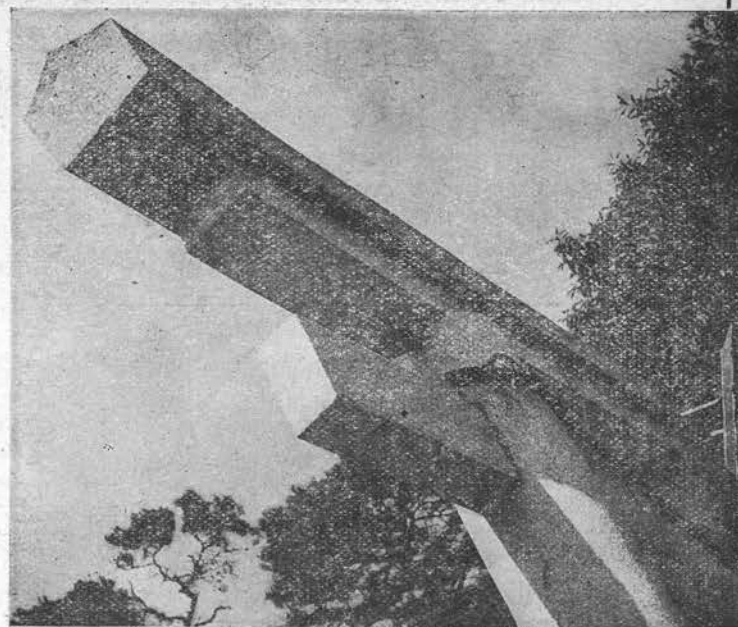
そしてやす子さんの筆で「丸帶は、無垢な處女から、悦びに燃えて、眺められるものである。さうして、疲れた妻の追憶の殘骸と云ふべく算笥の底に、うごめくものである」と書いてゐた。又「丸帶は、人の好い親が、娘の身の落附を安堵するための注連繩である。芝居・活動・見せませんでした。銀ブラもさせませんでした。と清淨其のののように誇る母が、横を向いて舌を出して居る男の手に、徐に繋がる「犠牲」への水引である。」と呟つてゐた金銀の輝きを見せた華麗な丸帶が百貨店のウキンドから十月の七日限りで姿を消した。新體制の威力があの世のやす子さんをばえませてゐるかと思へば僕までが、ばええましくなる。



號令をかきつけた思ふ稲の列 八歩 ラマカ 福井 哲

第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	第十一	第十二	第十三	第十四	第十五	第十六	第十七	第十八	第十九
神武天皇	孝靈天皇	孝昭天皇	孝安天皇	孝元天皇	孝化天皇	孝神天皇	孝仁天皇	孝行天皇	孝務天皇	孝哀天皇	孝神天皇	孝德天皇	孝中天皇	孝正天皇	孝反天皇	孝履天皇	孝仁天皇	孝武天皇
第二十代	第二十一代	第二十二代	第二十三代	第二十四代	第二十五代	第二十六代	第二十七代	第二十八代	第二十九代	第三十代	第三十一代	第三十二代	第三十三代	第三十四代	第三十五代	第三十六代	第三十七代	第三十八代
安寧天皇	雄略天皇	寧ろ天皇	宗賢天皇	烈祖天皇	體仁天皇	開化天皇	明達天皇	敏達天皇	崇峻天皇	推古天皇	舒明天皇	孝德天皇	孝武天皇	孝靈天皇	孝昭天皇	孝安天皇	孝元天皇	孝化天皇

歷代天皇御追號讀法



景風るあの居鳥

祝日獨伊同盟

柳川ドイツ小史

戸田孤篷

(一)民族の起源

地球上に人類の發生した始めは印度の北部ヒマラヤ山脈の西につづくパミル高原といはれてゐる。世界最初の文化の一つは地中海を中心として、ハム・セム兩種族によつてナイル及チグリスユーフラテス河の岸に開かれ、次でアリア種族のギリシャ、ローマ起る。西紀二世紀より四世紀にわたる民族大移動によつてアリア種の後継部隊ゲルマン族が東より北より中原にせまり、獨逸史も又こゝを以て起源とする。それから現在のヒットラーの登場を第四回目とする四回の得意時代と三回の失意時代を経験してゐる。けれどその位置が諸豪の真中に存し、善きにつけ惡しきにつけ非常な鋭敏さを以て民族の盛衰に影響した。

原つばへまだ季節風吹き止まず
原つばへいつまでつゞく季節風
トロワイに大きく鹿を一つ彫り

(二)フランク王国

スカンデナヴィア半島より移住したゲルマン族は半未開の野人であつた。狩獵民族の常として北ヨーロッパの森の中の彼等の住宅は獲物の頭骨などで飾られてゐた。然し間もなくライン河ドナウ河でローマ帝國領と境を接する様になると、生來の睿智は早くも文化の曙光を見出し自由性は自治へ、百人組、千人組等の制度を産み、フランク王國を建設。西ローマ帝國は滅んで、カール大帝即位し、死後帝領を三分して獨佛伊三國の基礎を作る。後神聖ローマ帝國となりオットー一世出て當時の世界制覇をクロイツアツプする。

陽光燦々の葉影と子の影と
北斗星ローマの捕虜はくしやみする

牛を割く親ゲルマンに子ゲルマン
酋長の選舉に森は暮早し

(三)三十年戦争

ローマ帝國衰亡以後のヨーロッパの長夜の眠りを醒ます曉鐘は十字軍によつて打ち鳴らされた。その結果は聖地エルサレムがオスマントルコの蠻族に征服されたのを恢復云々の本來の目的よりも、中欧の經濟に交通に軍事に文化に希臘への憧れがよみがへつて文藝復興をもたらし、尊重されるとつけ上るの教會や僧侶だけではなからうがそれが墮落の域に達すると宗教改革の火の手が上る。ゲルマン人マルチンルーテルが立つ。新舊兩教徒の争は各地に起り、列國の對獨干涉は三十年戦争となる。神聖ローマ帝國はわずかにその名を止めるにすぎず。戦死、虐死、病死、餓死が國內を掩ひ、人口亦五分の一乃至二分の一を減じた。宗教戦争にやぶれた英國民がメー、フラーワに乘つて新大陸へ逃避した様な眞似は出来なかつた。併しこの没落寸前のカール五世の帝國は繁榮の頂點であつた事も歴史の眞理であり皮肉でもあつた。

新教徒メー、フラーワに乗り
大信正逃げ仕度してミサへ出る
偶像がドスンと音を立て、落ち

(四)フレデリック大帝

ドイツが四方八方より強い風當りの中でもがいてゐる時、お隣のフランスでは「朕は國家なり」とうそぶくルイ十四世があらはれヴェルサイユ宮殿が出来た。佛文化は遠慮なく流れ込んだ。これを上手に利用して國力を恢復したのがフリードリッヒ大帝であつた。自ら佛の文豪ヴォルテールを招いて文學に音楽に民族文化の最初の華を開かずとゝもに、フリードリッヒ法を制定し十六萬六千の常備軍をそなへてゐた。バロックの建築がポツダム宮殿を残し、ヘンデルバッハ、ハイドン、ベートーベが幾多の名曲をものしたのもこの時代。

教改革の火の手が上る。ゲルマン人マルチンルーテルが立つ。新舊兩教徒の争は各地に起り、列國の對獨干涉は三十年戦争となる。神聖ローマ帝國はわずかにその名を止めるにすぎず。戦死、虐死、病死、餓死が國內を掩ひ、人口亦五分の一乃至二分の一を減じた。宗教戦争にやぶれた英國民がメー、フラーワに乘つて新大陸へ逃避した様な眞似は出来なかつた。併しこの没落寸前のカール五世の帝國は繁榮の頂點であつた事も歴史の眞理であり皮肉でもあつた。

ベルリンは遂にベルリンらしく生き

(五)ナポレオン時代

佛蘭西の自由解放時代は極めて大革命を勃發する。自由の叫びをいつかくにや〜と皮肉にも專政に塗替へてしまつたのもナポレオンなら、恐怖時代から新秩序に大衆を安住させたのもナポレオン、四隣に多數の被征服者を作つたのもナポレオンドイツも御多分にもれずその仲間入をして苦杯をなめる。この混亂が「暴風怒濤時代」なる文化年代を作りゲーテをシルレルをカントをフイヒテを産む。かの神聖ローマ帝國は滅び、コスモポリタンの思想も滅んだ。フランス文化を獨乙的に濾過した所にスタインが立ち、ブリュッヘルがウオターローからセントヘルナへ、ナポレオンを叩き込んでしまつた。「オルレアン」の少女「ウイールヘルム、テル」フ「アウスト」獨逸國民に告ぐ等の文學的作品に雄渾なる愛國思想が盛られた。

獅子吼する戸外には佛蘭西巡邏兵
しはらくは無言ゲーテとナポレオン
佛兵にラインの乙女からかはれ

(六)ビスマルク

被征服者の中から立ち上らうとしたのがオーストリアとプロシヤである。映畫「會議は踊る」で御馴染のメツテルニヒがオーストリアを代表し、ビスマルクがプロシヤを代表してゐる。獨

られ、いたずらに高い鼻とカイ
ゼル鬚に物を云はせて、外交何
物ぞとヨローツパのにくまれも

れてゐるウイルヘルム二世

(八) ヒットラー

(八) ヒットラー

天文學的數學の賠償金はドイツ民族を奮起せしめた。全體主義による驚くべき能率はそれを課した舊體制の諸國をゲンゲン

黒服ビール

ユウモアを探る

⑥

福
富
雷
童

獨り腹をかゝへて笑つたり、吹き出したりして歐米十ヶ年の繪畫旅行中のユーモアも時間が経てば何の變徹もなくなつてゐる。

ドンに行つても亦衝突ばかりしてゐたり（左側通行の本案）した事は誰でもやることだがぶつつかつた瞬間「はつ」として思ひついた時の顔はやつて見ねば分

却つて其當時それが通だと考へられたことが今は笑の種となつてゐる位です。例へば巴里の土になつて世界的の仕事爲様と努力してゐた當時、日常使つてゐた「世界的」等の詞が自然とこちらに歸へつて笑はれる種となつて容易に笑はぬ亞鈍君などに腹をかゝへさしたりする。

今から十五年、前最初シヤトルに着いた當時、あのノッポの米國人にぶつかつてばかりゐたり。(右側通行の國)十年後ロ

らない。
オートパークに腰を下して海を眺めてゐて自動車のラッシュにあつて逼々の態で逃げ出し後を振り向いてハ、ア、オートモビル・パークینگ(駐車場)がそれにしても公園のやうに廣い處だなあと驚いた顔等人には見せられない。

僕の滞米三ヶ年間はフーヴァ大統領の時で禁酒時代。好物の水もなめられない。だが手製のコージ臭い、ドブロクのやうな

エツコを崩壊せしめミュヘン會

ソリニーと提携し、持たざる國
日本をさそつて三國防共協定を
結び、たまたまダンチヒ問題起
るや兵をポーランドに進めた

ヒットラー大言壯語にはあら

ヒツトラー大言壯語にはあら

ヒットラー先ず凱旋の日を約
し
日獨伊明日の地球を見つめた
り

酒はコップ一杯一弗で密賣されてゐた。ノツボの米國人中から又ノツボが選ばれたお巡さんが平氣で料理屋のママムの振舞を受けてさつさと立去つて行く。米國なるかな。だが料理屋からお巡さんに毎月拂ふ金は大したものだらう。

兎も角公然と飲めぬ禁酒國である。慇々巴里に向ふことゝなつたが、當時巴里で開催中の日本畫展に加はる爲に米國經由で行く日本畫家K氏と同道することゝなつた。K氏は英語も佛語も盲目同様だつたが例の好酒家だつた。慇々ニューヨークを離れると禁酒がとかれて久方振りにビールを公然とあふつた。巴里についてからモンパルナスのカフェー・ドームに腰を下した時の話である。僕は急にトイレを置いて立つた。（外國で言葉の出来ない人との旅行は全く子供を連れて歩いてゐる様なものである、）暫くして歸へつて見るとK氏今日はしきりに白い前垂をした給仕君と笑つたり怒つたり快談をやつてゐる。どうも不思議だと思つて聞いてみると既に地球を半周してゐる彼氏である。度胸は坐つてゐる。佛人をつかまへて向ふのわかる迄押問答をやる積りらしい。だがK氏の言つてゐる事が僕にも分らない。ビールといつては人差指で胸をドン／＼ついてゐるのである。とう／＼埒があかない。「いや黒いビールが慾しいんだよ」と白狀した。成程色の好みも段々追求してゐると結局黒で落付くらしい。ある人は黒に逃避するといふ。又卑怯だとも言ふがK先生正しく黒一天張である。服装は皆黒である。紐育で僕に黒のネクタイをプレゼントしてくれた事も肯かれた。正しくビール黒（ビエール・ノアール）である。（筆者） 洋書家

川柳塔



路郎選

大阪 高橋かほる

十月の暑さを袖で煽がれる
荒物屋バスが通つて忙しく
鮮人の若さ大阪辯で云ふ
道問うて禮も云はずに瘦せた人

老父久調上京

横濱 福田山雨樓

よく笑ふ老父に逢ひうれしくなりぬ
白米の土産を老父は脊負ひ來ぬ

兵庫縣 奥村丹路

子を抱いて有明の月見ついたり
處女ふたり訪ひ來れば家も明るし
小川清しこの村二十戸にも足らず
目高泳ぐ手を指出せば逃る逃る
君も來て忘却の鉄打ち込めよ
夫婦とは静かなときのいゝ言葉

張家口 岩崎柳路

スパイにも見える牧師の瞳の光り
或日ふと妻の寝顔の面白く
空襲へ平和の鐘も皮肉なり

祖界風景

氣まづくなつたか英米トラスト店を閉め
鳥打帽の父と歩くも久し振
踏切で待つ間も米の話が出

兵庫縣 寺井鏡々

ムギカレ一のひるめしけふも無事に済み
國民服丁稚の姿勢まで變り
錢湯へ國民服は下駄で行き

金銀糸あはれな着物として残り

大阪 大西八歩

ランペンへまだ分別がいのなり
うらぶれて寫眞ブックを大事がり
統制へ肘をつかねる日の多く
羽ばたきも籠の中なる不甲斐なさ
生活を車輪も知つてゐる如し
霜髪に置きし力は尊とかり

布哇 高澤一浪

元馴染清い心で手をにぎり
金と閑燕のあるも無理ならず
平熱の時は好きな娘きてくれず
晩酌をすごしプログラムがくづれ
若返る法の一つにする遊び
臍線が壹弗だけの妻だつた
女から女狂ひを責めらるゝ
風向がわるし今宵はあきらめる
逢ふ迄は電話なりとも掛けさせず
考へて置けと成金振つた客
宿帳へ偽名四十に手が届き
据えておくだけで用足る空金庫
握る手は七千キロも物ならず

自由朗氏へ

大阪 戸田孤篷

周防町で素足の女一人降り
名月も算盤おいてゐる主人
モンペイの柄にも女虚榮心

大阪 中島生々庵

柄がさうのこうのモンペにマダム振り
モンペ着た母ちゃんへ末の子聞き分ける
子の短所御自分そつくりとも知らず
母病むの報に心寒し
待つて呉れまだ孝行が足りてなし

福知山 小畑自由朗

防空へ隠居も杖で馳せ参じ
經驗が寄つてたかつて壽命にし
手遅れだと醫者はさつくと手を洗ひ
川底がのぞけて釣のあほらしさ

活字斷想

ホノルル 古川風竹

宋朝は近衛首相に似た活字
組直し矢張り職工長が勝ち
硬い文字女性のルビがやわらけて
八ボの田さかさ見落す給料日
三人の智慧で讀めない伏せて置け
インテルよコミよウカぬが生きて道
活字だけは世界平等なんだが
けふの歴史を書いてケースへ販る

日獨伊同盟

ホノルル 前山北海

日獨伊結ぶヤンキー聲を囁み
弗稼ぎ圓で消費の日本行き
サンデーの寛げる身にアロハシャツ
ル大統領の徴兵登録布告
四十過ぎ他人事に聞く登録日
苦勞人事情も聞かず金を貸し
入學へ靴だパンツだ母疲れ

外国人指紋登録

ホノルル 藤井友郎

家の前ツイ通り越す物思ひ
まだ生きるつもり歯なごなほさせる
目的が小さくなつて氣樂也
他愛ない話枝豆たべながら
目刺焼く匂ひとなりの家からも
姿見へ決心つけた帯をしめ
浴槽へいつしかほぐれくる心
信仰に生きねばならぬふしあはせ

大阪府高石町 米本貴志子

キツチリと時計合せて遊んでる
老木も許すかぎり風は風にそひ
星までが鳴いてる様に虫の聲
垣に來て山羊は甘へた聲を出し
兒の使ひ玩具のほかは忘れたり
肩書が取れてよき友丈のこり
皇紀二千六百年に子を捧げ
一莖の草も自分の影をもち
人の世の姿か落葉舞ひ狂ひ

大河に寫れば灯かげこせつかず
病床へ娘の縁談を持ちこまれ

大阪 橋本 綠雨

立呑みに意外な人に出合ふなり
フロツクが揃ふ兄弟うらやまれ
釣竿へ夫婦で來ると釣れぬなり
コスモスは妻の脊丈とよく似たり

某氏三十二年動機

故里で家も買つたと誠首を待ち

大阪 魚住 滿潮

宗衛門町あそこここに非國民
王手飛車そこへ空襲解除の報
肩書がないので此處から手を合し
工廠の方へも履歴出しておき
税金で動きのとれぬ程儲け
箸おいて聞く十圓の儲け口

百圓札おのせの如くなる積り

隣組親の代からもめてゐる

國勢調査無職と書いて三味の音

父の欠伸それから家内中うつり

法律に楯突く人とつゝ鍋

日、獨、伊寄れば斬るぞの構なり

大金銀糸ぬけば喪服のような柄

隣組植木の砂を分けてくれ

畫風呂は道樂をした心持

心にも無い蔭口が口をつき

よう云はんわなごとおつしやる新夫人

斷つて見ても蛇足は蛇足だね

病褥のここへも朝日惠まれる

ご免ねと云へばも一つしやくり上げ

役不足それで解つたあゝそふか

額の繪は裸よ西日むごたらし

代表の役を濟ませた珠數返へし

雨に風なんのゝと案山子佇ち

防空訓練の一日

傳令となつたばかりに老を知られ
あれが妻か梯子の上のモンベ見る

大阪 中内 翠芳

穩かに過して國の恩思ふ
長男と二男と目方同じ事

下 多田市多樓

臺所無性に煙つて妻は留守
御主人は留守だが菊の出來はよし
つぎはぎのシャツが奉仕の汗にぬれ
夏瘦の妻が詩になるのいとし
日輪へまともに翁手を合せ
逢ひに來てまた冷笑へ突きあたり

下 濱田 賢次

死にたまへ僕は働く方がいゝ
うるさいは世間でなくて君なんだ
月賦とも知らず儲けたなあと言ふ
看護婦がさうのこうのと見舞に來
食ふための易とはみえぬ鬚があり
氣に惚れてゐるとも知らず塗りたてる
吸取紙花子ゝを吸はされる
節米を皆心得てゐてうれし

一億一心その日ゝが奉公日

赤心に變りはないが第二乙

きつばりと銃後は僕が引受けた

眉を引く奴も惚れてる奴も奴

雨垂へ出て赤蟹は背伸した

爪かんであるがねつから夜は更けず

井戸水を飲むのに蜻蛉のかされる

井戸水といつしよに蛙あがつて來

牛のよに使はれながら捨てぬ慾

おゝ遊べゝと意見なり

給仕とて憤るときには憤ります

日獨伊並んで風にふかれたり

慾捨てたさうだが貸してくれもせず

石原伯峯君召集を待ち兼ね

第一補充その食慾がたのもし

大阪 大森 風來子

陣中メモを拾ふ

まづむねをあたたまをいれる壕を掘り
下駄の登廳を許さる

下駄の目方なき考へてフオーク取り

そむき去る人形に似た女なり

柳心合掌 兵庫縣 水谷 鮎美

合掌の阿彌陀にちかき人の呼吸
合掌の膝にも雲に似たるもの
闘ひて勝をゆづりし合掌よ
合掌へ武器なきものの善き心
合掌の死におくれたるのも哀れ
合掌の闘ふものをジツト視る
合掌の佛が見えぬのにあわて

名古屋 吉田 水車

菊を脊に新體制を放送し
虫一つ逃さぬばかり急降下
柄なんぞ言うては居れぬモンベ隊
モンベ隊都大路はレビユウめき
昔物一と役買ふたモンベにて

大阪府柏原町 宮岡 白峯

榮轉と云ふ聲がする聲がする

實戰の中へもほしい静けさよ

脊に兒がありバケツのりレ

大砲の音無き秋の山淋し

ともかくもバーマネットは追はれたり

明日も亦働く足を洗つとき

トロツコトロツコ天高く工夫のひるめし

男前の案山子へ秋の風がふく

かんてきも割らうとすれば固いもの

頂上の海は日の出の話する

ゲートルの足の細さを笑ひ合ひ

強行軍野菊を足に踏んでゆく

入智慧を道々つける里の母

秀才に素性のことで難をつけ

美しい義理の親娘の仲がよし

大阪 正本 水客

前身はダンサーと云ふことにする

豊中 黒川 紫香

倒産を知らず今年も柿がなり

柿の木は横で国旗が強く揺れ

臨終へ女中も隅へ泣きにくる

合オーバ樹にひっかけて晝にする

無難作に下駄ぬいである旅人宿

コンバクトお早う位でふりむかず

大阪 丸尾 潮花

姉の荷が川沿ひを行く灯を見つめ

噂する程にも二人なりきれず

暇なのが犬の轢れたのを囲み

彼氏とは七・七令に恥じぬひと

(十一頁の續き)

年の弱さを詠つただけでなく、

大いにかゝる青年たらざるやう

に警告した思ひが多分に織り込

まれてゐるので近頃珍らしい、

いゝ句だと思ふ。しかし、一方

にはそうでない弱くない青年も

ゐることを句の上に反映してゐ

る。例をあげると

靴下のない行軍を君知る

や 大森風来子

これは歸還兵の句である。そ

れから、

親しき友應召

召集の先を越されて笑ひ

合ひ 勝谷山川兒

と云ふ頼のもしい青年もゐる

それから、

長男徴兵合格

大君の楯となる子を見直

しぬ 米本貴志子

これは、母親として詠まれた

句であるけれども、見直された

堂々たる青年が、むしろ大寫し

のやうになつてくる。

これらの句を見てゐると従来

弱々しく思はれてゐた青年諸君

なめらかな勾配親娘の傘がゆく

銘仙でよし新體制の街をゆく

尼崎 酒井 斗風

淋しい日言葉すくなく人を戀ふ

會ふたびに孤獨の胸をさぐられる

悲劇とは知らず化粧をしてゐたり

白痴美に近いマダム文學論

大阪 北川 春巢

金糸銀糸ぬげば令嬢瘦せてゐる

病人が隣りのミシン氣にしだし

赤ん坊の時の寫眞も持つて嫁き

子煩悩子を自轉車へ乗せ廻り

親の子だなぎと飲む子は飲ましとき

亞鈍||それを云はしたかつた

んや。(哄笑)

孤蓬||ウツツ、引つかゝつ

た。(やゝあつて)もう先生のお

話がすんだ後から、かれこれ云

ふべきではありませんが、それ

云はされたもんやさかいに。(笑

聲)

憂き事の皆無か兵士の顔

の艶 得能 紫浪

を擧げます。

路郎||いゝね。

孤蓬||興亜の青年一人残らず

この艶にならなければならぬ

と思ひます。

亞鈍||某人君はどこからみて

も弱いと思ふが――。

某人||いや、志が強い(笑聲)

その志の強い句を。

未亡人ポスターを貼る壁

を貸し 北川 春巢

これはさつき先生が引かれた

句とくらべて消極的であること

は争へないけれど一つの志の強

さを持つた時局を認識した未亡

人を感じしめる。こう云ふ静か

下園 櫻川 不水

陽溜りに去年の乞食つゝがなし

空想はあの山越えてまだ遠し

玉葱のげつぶ手製のアツパツバ

蠅捕りの名人にして用がない

空舞ひの芯がそれてるのも知らず

商人の齒切れのよさは「ない」のなり

百姓の威勢に菜ッ葉買ひそびれ

廣島 濱田 久米雄

演習の有難さなり隣組

コスモスの道を仲人曲り来る

軍刀の横で婆さんかしこまり

に内容が

大切であ

るかを痛

感させら

れませう

お齡はそ

うでも(笑聲)

鮎美||亞鈍さんの云はれたや

うに、僕の實感と空想とは第三

者には見當がつかんです。しか

し、いまの顔の艶の句ですが、

今後もそれでゆきたいと思ひま

す。

亞鈍||豆秋さんにはどう云は

うかな。

孤蓬||そら、頭の艶や(哄笑)

某人||防空がそんなこと云ふ

たらだもならんがな。

豆秋||とうとうお鉢が廻つて

きよつた。これ興亜の光りや。

(笑聲)

亞鈍||それでは、帽子をかぶ

つたところで、なにか。

豆秋||先生の擧げられた青年

子女の句を見ますと、一種の嚴

肅さと云ふものまで感じられま

す。これは句の内容が持つ、た

くましさに心を打たれると云ふ



山口 倫子
經營
電南 992

淑髮ウエーヴ

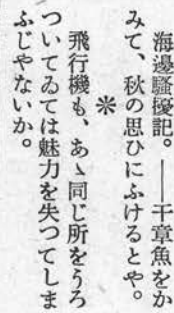
大阪・心齋橋筋周防町角

ナショナル

(順・筆記)

二 省 子 蛭

◆九月一日——關東大震災罹難者としては、憶ひ出が深い。俱に夜警などした隣家のK御夫婦は松代出身（松井須磨子の親類）餘震頻りなる中をお勝手



(續)

寝るばかりなる春の留守番。
 ＊ ＊ ＊
 いかなこ。 蒨葎草。 田螺。
 ＊ ＊ ＊
 田螺の酔味増和へ。これはか
 なしいね。まるで涙をかためた

暗き灯のもと
一人なればおかしくも
心沈もる
春のくれ方

舊師かなしく老ひ給ひ
ふるき生徒
また徒に年を拾ひて
街に生く

＊
いて土の
春にはとびる
みぶるひの
なみだならずや
この田螺
世にあらはれて
酢味噌和へ
わけぎ、筍
そが中に
舌におかしく
齒にかたき
田螺その性
あはれそを
肴となして
喰べおしみ

喰べおしみつゝ
たゞひとり
淋しきおのこ
湯のみもて
酒をのむとや
春のゆふぐれ。

＊

一週間の Yama だが氣にする
必要はない。絶食も一つの健康
法なだから。

＊

用事のない手紙、これ位苦手
なものゝ又とあるまい。然も少
しはひらめかせたい氣も交つて
ゐるから一層のことである。

＊

ネタだ、ネタだ。ネタさへあればあとはどうにでもなる。見えすいたこさへ事にならない程度に實の入つたネタ。

＊

酒をのまなきや愉快になれないといふのは二重の悲しみである。一つは飲む人間の、もう一つは、愉快といふものの、稀薄性の。

＊

なんとかしませう。
なんとかしなきやあ。——
あゝこれでもつてる浮世なんだか。(つよく)

け、其間の努力——殊に私が今度の旅行で滞阪半ヶ月間に目の當りし得た御夫婦の奮闘は感服以上だ。スリ切れてしまふのではないかと憂慮にたへず、保健上に就て度々進言もした。——森東魚さんとも其事につき地下鐵内で語合つた。——然し雜誌に川柳詩に責任をもてば、倒れる迄やるのが本懐でもある。斯くて月刊「川柳雜誌」が世に送られつゝある事を訴へたい。當初からの同人は橋本綠雨、岩崎柳路の兩氏。最も多く寄稿したのは私であらうと自負する。

◆「省二氏に聴く」の中に「不朽洞に二泊しましたかね。川柳人の家に泊つたのは前後その一度支けです」と語つて居るが、八月十八日信州入りをして以來、我忘園（紫國手本邸湯田中温泉）と玄々閣とに今尚ほ居候である。老書生の我儘振りを遺憾なく曝露してしまつた。其上一度は胸を叩いて喘息の診察をして貰ふつもりで居るのだが、國手とは未だしみぐと川柳談

を交換してゐないのだ。この廣い温泉地帯にお醫者様が二人きりで、浴客殺到は一室數名を詰込む。患者は續出する爲に不眠不休の往診、よくも體が維持されるものだ神業のやうな思ひがする。私は數回晩飯を俱にしたが、大抵十二時か一時過ぎだ。布團上に横になられる時間がないのだ。醫者を不養生にするのは患者である。平素病弱な私は内省せねばならなくなつた。然し國手の此の日々が全く川柳詩そのものだといふ事も判つた。劍花坊は「信濃から江戸の燒傷へ塗藥」の一句を遺して居る。ヤケド治療は妙術とせらるゝ處、東京名古屋を遠しとせず來て居る患者が多々ある。ヤケドの夥多しいのにも驚く。

◆大阪の宿で外出中に鞆の錠前を捻ぢ切り財布丈に盜難にかゝつた時は、旅話が一つ出来たと思つた。昔からゴマのハイはつきものだ。玄々閑には淑人氏御令息の事業である農園の肥料供給の爲に養鶏場があるか

花 花 花 花 花 花 花 花
環 籠 花 花 花 花 花 花

フー



もきかぬ。熱海では婦人の浴着に細紙などの身なりを禁止たと新紙にあつた。山の奥だて女は女らしい身だしなみを着てはならぬ。私でも羽織は着用して居る。

街に住めば
高橋かほる

いかに幼き小兒と云ひなが
がんぜなき事申すもの哉。「毛
ノ生へた栗買うてや」毛の生
た栗とは即ち毬栗の事。いが
包まれた栗を毛の生へた栗と
都會の少年の表現らしく實に
晴しき傑作に候はずや。

リスト

くれない

阪市西區京町堀通り三丁目
話土佐堀五二二〇番

花 花 供 生 造 裝
環 籠 花 花 花 飾

フロリス ト

紅
くれない

大阪市西區京町堀通り三丁目
電話土佐堀五二三〇番

武玉川四編研究 (十二)

梅 森 本 東 山
蛭 子 省 魚 二

(288) 起ても彌陀と庵に二人

省二「寝ても亦彌陀と二人。佗びしい庵の日々は好日。」

東魚「俗塵から超脱した境涯、句訥に暢びり超越した心持が見える。」

聖山「此の「二人」は「ふたあり」と訓むのであらうが、少し感心が出来ぬ。」

(289) 御不快のそれとしれるハ御物好

東魚「よく解らぬが、御不快と云ふ事だがそれは妊娠に違ひない、食好みのそれからでも、分かるのではなからうか。」

聖山「食好みを物好きと云はぬやうであるから、妊娠せる女とも云へないと思ふ。」

省二「君命をそむいて奥ではめられる」で御機嫌の悪いのは、判つてみれば、御物好の癖から、とても云ふのかと思つてゐた。

(290) 一寸の先はあやなし紅襦袢

東魚「一寸先は分らぬ戀の闇路と云ふやうな事ではないかと思ふ。」

聖山「紅襦袢を着るは何人であらう。江戸時代には男子も着た故、向見すの青年を詠んだ句かと思ふ。」

省二「紅襦袢」と据えた丈では、表現不足、徒らに想像してみるので判然とせぬ。

着るのを女とすれば、やはり戀關係らしく解し置かねばなるまい。

(291) 横の戸を時雨で通ふ母の息

東魚「横の戸」は解らないが、何となく高野あたりの僧の學寮などのやうな氣がされる

時雨の淋しい時、母の息母の聲を聞くが如くに思ふと云ふ様な場合か。

(追考)。「横の板屋に音つては夜の夢を覺す」と云ふ、時雨に對する紋切型の文句がある。それにすがつて、時雨の夜の寢覺めに母を戀ひ思ふ心持を詠んだものと考へられる

聖山「平家物語」の、瀧口入道のやうな、世捨人の草庵であらう。横の戸や松の戸は、和歌に多く閑寂の草庵に咏まれてゐる。

省二「母を憶の情。」

(292) 薙な所も守る住よし

省二「住吉には特種の女の巢窟もあつた。東魚「海路も守り給ひ、戀の路も守り給ふと云ふのであらうか。」

聖山「御田植の神事など、脂粉の香がする

(293) 夢畑の猶々書に豆を蒔

東魚「手紙の尙々書きの様な趣に、夢畑の裾に豆を蒔と云ふのであらう。別に解しやうもない。」

聖山「前解の如くであらう。別に解しやうもない。」

省二「夢畑の空所利用。」

(294) 見ると詠ハ違ふことの葉

省二「結局、一見にしかず。」

東魚「詠は「ながめ」であらうか。」

聖山「坐五に「この葉」とあるから、「詠」は「よむ」で、和歌に詠まれた名所は、實景と多大の相違がある、と云ふのであらう。

省二「實は私はナガメとよむで、今詠して居る言葉とは違ふと、解したのであつた。」

(295) 食腸の笑ひ納め八年忘れ

東魚「忘年會だとして食傷するまでやる奴もないものだアハハと笑話にすんだのが、今年の笑納めであとは笑へない大三十日が控へてゐる。」

聖山「食腸は食傷の誤也。食傷をして笑ふ意が判らぬ。」

省二「來年の樽に手のつく年忘などの如く、食傷は鯨飲馬食して而て笑ひ納めの年忘れである。」

(296) 川留に足の淋しき供廻り

省二「供廻連、川留では任務上、どうも退屈であらう。「足の淋しき」は面白い表現。」

東魚「足捲えをきりつとしてゐないので、何となく足の趣きかものたらない。(主人公は駕籠などだから別にさうした感じはない) 聖山「足捲へを云ふのではなく、歩かぬ故に淋しさを感じるのであらう。」

(297) 師走の飛脚長い脇さし

東魚「師走故、金を預かり届ける事などが多いので、心丈夫な爲に脇さしも長いを持つて、道中するであらう。」

聖山「前解の如くであらうが、少し作り過ぎた句のやうに思ふ。」

省二「師走の飛脚には、十分身仕度はあつた。」

(298) 約束に砂糖のやうな返事來

省二「色よい甘い返事。砂糖の珍重された時代だから、中七の形容は、うつつけなのであらう。(初篇に「砂糖のやうな京へ縁組」丸山の揚代を益喜に砂糖で支拂つてゐる話がある。」

東魚「砂糖のやうなが、當時として奇抜な形容であつたのであらう。」

聖山「現代に斯る句を詠んだらば、採る人は無いであらう。」

(299) 借し方くる三須磨の逗留

東魚「見當がつかぬ。貸し方と云ふのは、網の金主でもあるのか、など想像してみるが

どうも解せぬ。

聖山「不可解。」

省二「貸主か追つかけてきて、須磨の美景のために逗留してしまふ。」

(300) 笑た人へたのむ綻ひ

省二「笑つたのだから、頼まれるれば綻つてやらねばならぬ。——そこを、ねらつて。綻びは男をこまらせる。「端折て戻る旅の綻び」(武)。

東魚「親しさが朗かに詠まれてゐる。」

聖山「衣の綻を縫ふのは、屢々戀愛關係を生ずるけれども、此の句には其様な事がなく、明朗であるのが宜い。」

(301) 扇の芝の細工過たり

東魚「かく曲くつた迄である。」

聖山「平等院内の扇の芝が、あはれ氣の薄いの事實である。」

省二「平等院けうけの様な古跡なり。」

扇の芝は今も尙残つて居る。「頼政は地紙の形に死で居る」(武・五)。

(302) かくし町へふれて寒き赤蜻蛉

省二「隠し町が潰れ、女具さがなくなつ

大阪 名物 松前屋 本舗 心齋橋筋 出張店 朝日ビル 専門大店 電話 四六六番 八二〇番

松前屋 布昆



松坂俱樂部

會員募集

川柳講座

川柳雜誌主幹

麻生路郎先生 擔當

あらゆる趣味のお稽古場

手はさきから奥義まで
氣軽く、楽しく、御上達

お稽古
種目

- 長唄 常盤 清元 鳴物
- 尺八 舞踊 謡曲 能樂 小鼓
- ピアノ 聲楽 日本 茶道 書道 華道
- 料理 裁縫 柳句 松坂 込所

御申込みは
七階 松坂俱樂部
電話 表代 三〇三〇番

松坂屋

大阪 日本橋

- ては、一層淋しくなる。飛んでゐる赤蜻蛉さへ、物寒い感じを興へる。
- 東魚「かくし町などは、寺近くが多かつたやうであるから、それが取りつづかれたとなると、急に淋しい斗りの處となる。寒き赤蜻蛉は描き得てゐると思ふ。」
- 聖山「晩秋の情景が、巧に表現されて居る」
- (303) 殊勝な顔を見せる鉢の子
- 東魚「鉢の子が分らないが、何か鉢へ入れた食物と云ふ意ではないか。鉢の子を前に慣ましやかにゐる趣か。」
- 聖山「僧侶が鉢をする時、手に持ち歩く鉢鉢を、鉢の子といふ。」
- 省二「鉢の子は露の命のおき所(柳樽)。「鉢の子へ煮えたつ粥や今年米」(太極)。「鉢の子へもの云ぬ手の美しき」(武18)。鐵製を主とし瓦鉢もあつた。殊勝な顔は施主の方か坊さんの方か。どちらにでも解し得られる氣がする。前例の「もの云はぬ手」なれば、明らかに女性を表はして居る。」
- (304) 面う出しのならぬ月日も過て行
- 省二「歳月の経過が世事を解決すると云ふ面出しのならぬ始末の月日も、早きは光陰で一年く経つてしまふ。(二篇に「不沙汰の顔に合ふ面かなし」)。
- 東魚「過ぐる間の苦しさは、笑止である。聖山「月日の経過すると共に、いよ／＼敷居が高くなる。」
- (305) 御内儀の顔へ着を突つける
- 省二「初鰯を突ツつける。「かみ様に出来ぬとにげる初鰯。」
- 東魚「生きの良い處を見てくれと云ふ氣味合ひ。」
- 聖山「突きつけるが面白い。」
- (306) 響らるゝ男の金ハはやく城
- 省二「男といふもの甘いものではある「はやく」は聊かあからさま過ぎる。」
- 東魚「綺麗に遣へば響められ、響められ、綺麗に遣ふやうな羽目になる。」
- 聖山「恐る可きは巧言令色である。」
- (307) 年明のうまい言葉に丸裸
- 東魚「年の明いた女が、巧く男の言葉にかかつて稼がためたものを、取上げられるのであらう。」
- 聖山「年が明けるとお前の處に往くよ、と巧みに男を騙して、素ッ裸にするので、裸にされるのは男の方である。」
- 省二「この句も亦どちらにでも解される氣がする。「年明にはぎつ／＼されたはけ者」男が丸裸になる古句はある。原句も男の方が馬鹿をみるのに解して置きたい。」
- (308) 寝姿見せて岸を漕ぐ舟
- 省二「岸を漕ぐから風情あり。」
- 東魚「歸る猪牙であらう。」
- 聖山「椎の木屋敷の前を漕ぎ歸るのである省二「猪牙説結構。寢釋迦のあつた古句あり。」
- (309) 隣のむす子やかて人參
- 東魚「あゝ遊びに凝り出しては、やがて精力消耗、人參を煎じねばならぬやうにならうとの意か。」
- 聖山「大人しい息子の癆瘵下地で、放蕩者ではないと思ふ。」
- 省二「此句も亦兩説どちらにも通ずる氣がする。「勞咳のもととは行儀をよくそだち」などを一應參考として、子の日などと讀むで居る息子が、勞咳となつて人參の必要もおこる。「勞咳の母は近所のどらをはめ。道樂息子にはな／＼罹思せぬ様にもなつて居る。」
- (310) 二階の咄しんはりて突く
- 省二「二階でいつ迄も咄聲が、絶えぬのにたまりかね、締張棒で突いて注意(邪魔)をする。」
- 東魚「前説の如くであらう。ちと妬ける氣味が思はれる。」
- 聖山「帯の柄でも、突く場合がある。」
- (311) ちからか有て下卑た若殿
- 東魚「若殿といへばやさ形で、侍女などが秘かに噂をしやうと云ふ人物が、適はしく思はれるが、力が強いとは、ちと色消しな事だと云ふのであらう。」
- 聖山「筋骨の逞しい若殿、歌舞伎劇にあるやうな優形ではない。」
- 省二「蠻骨の若殿様。」
- (312) 旅の節句の痒い月代
- 東魚「月代がのびて痒い。旅だから剃りもせずに居る。」
- 聖山「自宅に居れば、節句に髪月代もするが、旅に出ては夫れも出来ぬ。」
- 省二「旅では節句も何にもないといふ氣分」
- (313) 人參か有て思ぬ弓も引
- 東魚「どうも分らぬが、人參を飲んだお蔭の精力で、思はぬ強弓を引き得たと云ふのか聖山「前説の如くならば、「人參が利いて」と云はなければならぬ。不可解。」
- 省二「？」
- (314) 年功の柿にあるしの舛枕
- 省二「年功とは結實する事の少い年の謂。主人は旅に出てゐて不在。(年功の老木も柿の若葉かな(千川)。)
- 東魚「主人旅にあつて、木の世話も出来ぬのであらう。」
- 聖山「京都の落柿舎でもある敷。」

武玉川四編研究正誤表

(第一九九號)	(頁)	(段)	(行)	(誤)	(正)
同	九	一	二	餘	せぬ
同	九	二	三	頗る	余(原本)
同	九	三	八	似て	頗る
同	九	四	六	流行	以て
同	九	二	六	破魔	旅行
(第二〇〇號)	九	二	六	破魔	弓
(第二〇一號)	八	三	一	崇る	崇る
同	八	三	七	前に	前に
同	八	四	三	柄杓が	外に
同	八	四	二	襖裏	で
同	九	四	二	誠	誠
同	九	四	二	誠	誠



月 評 筋ト一柳川

★
路 鮎 某 孤 亞
郎 美 秋 人 蓬 鈍

路郎「世を擧げて新體制の時
代になつてきたので、月評會も
新體制でゆきたい。司會は亞鈍
君にお願ひする。」
亞鈍「それでは、豆秋さんか
ら初めて頂きませう。」

重點主義

豆秋「自由主義の夢を捨て、
不生産的な職業の人が新體制の
要求する、重點主義・國益中心
主義的な方へ轉業した時局的な
句が、たくさん見受けられたが
そのうち、代表的な句を二、三
拾つてみよう。」

轉業のヘイヘイヘイと髭
があり 清水史路

などの句は、餘程の決意を以
つて新體制に沿つた職業に轉向
をした心構への人の句だと思ふ
軍需工目指して田畑捨て
ゝ出る 潮田明坊
これは、いくら國家の爲に國

益中心的な方へ轉向すると云つ
ても、間違つてゐないかと思ふ
田畑を捨てゝまでは、行き過ぎ
ではないかと思ふ。
國策川柳を作る上に於て、注
意せにやならんと思ひますのは
川柳本來の性格を忘れてはなら
んと云ふことである。その點、
「轉業のヘイヘイヘイと髭があ
り」などは川柳の持つユーモア
をうまく捉へておつて、決して
標語のやうな川柳になつておら
んと云ふことを、推奨したい。
亞鈍「これに對して御意見が
あれば、孤蓬さん、なにか。」
孤蓬「いまの髭の句ですね、
この髭は前からあつた髭でせう
な。」
豆秋「そうですね。」
孤蓬「轉業をしてから生やし
たんぢやないでせうな、私の知
つてゐる人に轉業するんで髭を生
やしたのがあります。」

亞鈍「轉業したての人と違ひ
ますか、ヘイヘイヘイと三べん
云つてゐるのを見ますと——。
しかし、僕は云ひたいのは、ま
づ髭を清算してほしい。それは
川柳としてではなく、人間とし
て忠告したい。」

路郎「髭を生やしてゐると云
ふのは、曾つては相當の立場を
持つてゐたのである。それが新
體制下に於て轉業を餘儀なくさ
れたのであらう。そして生きん
がために、畑違ひの方面に轉じ
たのであらう。地位的に下つた
ことは云ふまでもあるまい。」

孤蓬「ヘイヘイ云ふのは自由
主義的な商人性ぢやないでせう
か。近頃はだん／＼商人も役人
化しつゝあるのに——、變です
ね。」

路郎「現在の地位が低いから
今迄の髭を生やしてゐて、ふさ
わしかつた経歴と對照して其處
にユーモアを感じたのである。
亞鈍「髭がいま／＼での経歴を
物語り、ヘイヘイが現在を物語
つてゐる。表現の方法が依然と
して、いま／＼での用語を使つて
ゐる。」

豆秋「そうですね、川柳の表
現も新體制にならなければイカ
ンな。」

亞鈍「髭とヘイ／＼の組合せ
でユーモアを感じさせるなどは
もう既に古く、あまりにも常識
的だ。」

路郎「さつき、豆秋君が云つ
た、「軍需工目指して田畑捨て
ゝ出る」だが、これはこう云ふ
現象もある、と云ふのであつて
讚美してゐるのではない。作家
がこう云ふ現實を指適して反省
をうながしてゐるのである。こ
う云つた表現は從來から多く有

家庭

つて、こう云つた句の場合は、
これを見る人がよく考へて見て
ほしいと思ふ。
亞鈍「ではこのくらいで鮎美
さんの方へ移つて頂きたい。」

鮎美「家庭は、まどらかでな
ければいけません。しかし、新
體制となつてくると家庭の一人
／＼にも日本を意識する心の強
調を、即應的にどし／＼今後も
續けてゆかねばならないと云ふ
ことを、まづ、そしてその意味
から句を撰つて見ますと、まだ
／＼ガツチリとこない點があり
ますが、益々打つて出る意味の
前提として以下の句を抜かつて
頂きました。」

だん／＼に聞く二線に夫
婦住み 米本貴志子
折釘も捨てずに國の強さ
知る 朝田新水
何々夫人衣裳比べも夢に
なり 長野文庫
全巻の終りに國債買ひま
せう 富岡巨人
老夫婦喜劇のやうに仲が
よし 山本葉光
妻はウキンド見てゐる夫
はそれを見てゐる 中西おさむ
ワイキキの日本へ續く海
へ佇つ 前山北海
節米で濟む日本のありが
たさ 長崎柳秀

こうした句を新體制に伸びて
ゆく道程の句として廣く包含し
ていゝと思ひます。
亞鈍「ワイキキの日本へ續
く」のワイキキ云ふのは先生、
どう云ふ意味ですか？
路郎「布哇ホノルルの海岸の

名前だ。景色のよい所で、觀光
客のための大小ホテルが海岸に
建ち並んでゐるし、社交歡樂の
中心地である。海水浴場として
も知られてゐる。」

亞鈍「そうですね、なんや、
ワイキキ云ふたらどんな洋食で
すかと聞かんでよかつた。ハッ
ハッ。(哄笑)」

豆秋「全巻の終り」の句です
が此の間も友達が家庭劇を觀て
來て、家庭劇はおもしろくない
なあ、と云ひよりましたが、なん
ですな、國策の織り込み方がな
んちゆうたらよいのか、餘りきつ
過ぎたやうに思ひます。
演劇や映畫が國策の精神を織
り込んだ爲に興味が喪失して、
なんや、おもしろくなつた
なあと見切られるやうな事がな
いやりに、脚本家やその他の專
門家が腕にヨリを掛けて、銃後
へ明朗な空氣を新體制に沿ひな
がら送るやうにせねばイカンと
思ひます。

鮎美「ほんまに、そうですね
ア。
孤蓬「亞鈍さん、それから、
貴志子さんの「だん／＼に聞く
二線に夫婦住み」これ、なんで
せう。やつぱり反語的な意味で
すな。」

亞鈍「えゝと、そうですね。
某人「いま、豆秋氏の芝居、
映畫が、國策的なものを織り込
めば、おもしろくない、退屈な
ものになると云ふのは、一つは
脚本家などが固くなり過ぎたこ
とゝ、新體制と云ふものゝずつ
と先の精神を消化してゐないで
ウワツツラをそのまゝ、概念と
してしか頭へ入れてゐない、そ

こにおもしろくないと感ぜしめ
た原因がある。だから、時事吟
の場合にも云へることで、何故
時事吟が人を打つ事が稀である
かと云ふのは、こゝに基因する

七七・禁令

某人「七七・七禁令に關した句
を採してみたが、思つたほどに
それに當てはまるものがなかつ
た。だいたい、七七・七禁令を公

布された現在の奢侈禁令の精神
は、單に贅澤をやめよと云ふウ
ワツラなもんぢやない。と云ふ
事が直接に——ゆき亘らなかつ
た。
僕は七七・七禁令と云ふものを

烏桃腺炎 12 効奏・期短・服内

ルシバル錠

文字に提はれ過ぎて、空舞ひし
てしまつたんぢやないかと思ふ
その點、

奢侈品を持つても行けず

靈樞車 藤井紫風

などは七・七禁令と云ふこと
を表はしてなくつても、七・七
禁令と云ふものの内容をよく表
はした代表句としてあげること
が出来る。これも或は七・七禁
令でないかも知れないが、

電髪につけられてゐる氣

配なり 得能紫浪

は、パーマネットの女の内心
に作用した七・七禁令と云ふ風
に見て、代表句の一つにあげる
ことが出来ると思ひます。

亞鈍「孤蓬さんは時事吟に關
心を持つてゐられることだから
七・七禁令についてもその如の
ことでせうが、どうですか。

孤蓬「いまの某人さんの云は
れた二つの句ですね。あれで新
體制の七・七禁令に關しては、
いづれも云ひつくされてゐるん
ですが、殊に、初めの「靈樞車」
の句に至つては、たんなる寫生
と云ふもの以上に深いものを、

即ち自由主義に生きてきた過去
のわれ／＼の生活に對して野邊
の送りをして、生れ變つた赤
坊の心にみんななれ！と突きつ
けられたやうです。

無論、この句は寫生ではあり
ませう。しかし、そう云つた「一
べん生れ變つて來い！」と云ふ
非常に厳しいものを感じます。
そこで新水さんの句が反語的な
意味として引用されていゝと思
ひます。

自由主義經濟の夢に置き

去られ 朝田新水

亞鈍「では、先生に御意見を
承つてこの題目を打ち切りた
と思ひます。

路郎「さきほどから聞いてゐ
ると、句に對する批評と云ふよ
りは、その題目に對する意見の
方が勝ち過ぎてはゐないか。言
葉を換えて云ふと、一つの川柳
を藝術的に批評すると云ふこと
よりも、時局の目で見て批評す
ると云ふ方が勝ち過ぎてゐない
かと思ふ。もつとも、新體制下
の川柳を我々の川柳の中から拾
つたのであるから、いきほひ藝
術批評と云ふよりも時局的な批
評の方に力點を置かれてゐるこ
とは、頷けるけれども、句として
の批評も、もう少し力強くやつ
て貰つた方が却つて、新體制下
の生活が句に反映したところが
表はれるのではないかと思ふ。

いま、某人君の批評した句の
中で、「靈樞車」の句の如きは川
柳としての深刻な内容が盛られ
てゐて、同時に新體制下の七・
七禁令にも觸れてゐる。その點
優れたいゝ句だと思ふ。

亞鈍「これで打ち切りたいと
思ふが、先生の後だからと云つ
て遠慮されんでも御意見があれ
ば、どうぞ。

豆秋「エ、アノは書かんよう
に頼のんまつさ。郷里でア、ツ
まだ吃つとんのんかと云はれる
さかい。(笑聲)「電髪」の句で
すが、この女性に既に心の自省
は出来てゐるのだと思ひます。
ところが電髪の悲しさで、男の
様にあつさり丸刈にも出来ず、
と云つて、オド／＼してゐるい
ぢらしいやうな氣持が良く感ぜ

られます。なか／＼いゝ句です
路郎「この句は本誌の十月號
に掲載されてゐますが、實際は
二ヶ月前に作句されたので、そ
れが三ヶ月目の十一月號にこの
記事が掲載されるのだから、近
頃のやうに刻々に變る世相に多
少そぐはない點が出来てゐるこ
とを考慮してほしいと思ひま
す。

防 空

亞鈍「その意味でこの二句は
七・七禁令に提はれないで、優
秀吟だと思ひますね。

亞鈍「では、こんどは孤蓬さ
んに願ひます。

孤蓬「防空については、モン
ペ、ガスマスク、管制、警報、
防火班、などの句が見付かりま
したが、さつき、先生がおつし
やられたやうに、句を防空とし
てよりも川柳として優秀なもの
を抜かりして貰ひました。モン
ペの句はざつと見たところ、一つ
は第二號であり、一つは藝者が
出て居ります。ガスマスクでは
ガスマスクにかびの生え

てる國に住み 北川 春集
この句は鮎美さんの抜かれた
柳秀さんの「節米で濟む日本の
ありがたさ」と意味は同じで、
日本の國の恩寵を感謝してゐる
句であります。「節米」の句と共
に、時局的であり、川柳的にも
よいと思はれます。管制の句に
はあまりバツとしたのがありま
せん。警報の句も省略いたしま
す。防火班の句では、

防火班だけのバケツかな
と笑ひ 宮岡 白峯
これは、防空演習用新調のバ
ケツばかりが目について、使ひ
古しのバケツが冷遇されてゐる
比較的なおもしろさを上手に川
柳的に取り扱つてゐられます。
このバケツの句から、

一石六厘水の有難味を知
らず 魚住 萬潮
は、本當の新體制の時局吟と
して挙げます。では何故、この
句こそ優秀なと云ふ譯は、佛法
領のものよと落ち綿をおし頂か
れた、運如上人の物を生かし
て、感謝して使ふ積極的な報恩
の心で以つてこの新體制に參照
してゆくと云ふ、精神が具現さ
れてゐるからであります。で、
あります故に國民は、どんな不
自由でも耐へ忍んでゆく心を常
に體してゆきたいと思ひます。
防空が變なところへ飛火しまし
ましたが、結局は水のところへ落着
きました。(笑聲)

亞鈍「鮎美さんは家庭的な方
だから、いまの水の句などにつ
いて御感想を。」
鮎美「もう孤蓬さんの説明で
盡きてゐます。強ひて云へば、
句を讀んでしまつた後の有難味
を感じねばならない妙味を味は
ふことが出来ます。と同時にこ
れにも相當作句を始終し、句を
見る必要を痛感させられます。
新體制の中に生きてゐて強く
生きてゆく川柳は見たゞけに留
まらず、次に來るものに耐へら
れるものゝ即應感を充分に練り
隣組を自分の家庭内でもガツチ
リと組んでゆく心が必要とされ
ます。まだ、充分に述べられま
せんが、お互に生きてゆく新體
制下、もつと／＼深く掘り下げ
てゆくべきです。

某人「僕は防空の句としては
孤蓬氏は自分で自分の句を抜く
譯にゆかないから、抜かなかつ
たが、

警報の中で木魚がなりつ
ぐけ 戸田 孤蓬

燈管の御蔭で天の川が見
え 同

の二つの句は他にたくさんあ
る防空の句の中で光つてゐると
思ふ。

豆秋「あゝ、あれ、よかつた
ですね。

某人「えゝ、これは防空又は
それに關聯したいろんなものを
スツカリ消化しきつてゐる點、
しかも讀者に警報又は管制下の
世界と云ふものをハッキリ感ぜ
しめる力を持つてゐる。こう云ふ
種類の句は理屈はなくなるのが一
般であるのに、理屈でなしに感
情、碎けて云へば聴覚、視覚か
ら具體的に描き出したにはお手
柄だと思ひます。

豆秋「ほんまに、こら、宗匠
みたいな句や。 孤蓬「うわッ！ そんなに云
はれたらドモナラン。便所へ行
つてこよう。(おこれよの聲あ
り)(笑聲)

亞鈍「先生は？
路郎「うん、岡田君に同感。
亞鈍「では先生——どうぞ。
つてこよう。(おこれよの聲あ
り)(笑聲)

青年子女

路郎「川柳を通じて現在の青
年子女を觀察してみると、まだ
新體制に成り切れないもの、心
は新體制に賛意を表してゐなが
ら實際は體力がともなつてゐな
いと云ふ様な點が見受けられる
例へば。

女事務ガラスのダイヤま
だ捨てず 戸田 孤蓬
豆秋「えゝなあ。
路郎「それから。
さればとて職工さんに嫁
く氣なく 勝谷山川兒
の如きである。しかし句とし
てはこれらの句が決してまづい
とは云へない。殊に「興亜の青年
疊一帖ようさげず」の句の如き
は少しく誇張した感があるが、
確かに今日の青年を穿ち得てゐ
ると思ふ。で、この句は單に青
(以下六頁へ續く)





同舟近詠

松山 前田 五健

御馳走へさうか私の誕生日か
ふるさこの話ほつゝ柿がむけ

興隆寺國寶の鐘

鐘撞いて鐘の行方へ目をつむり
歡びの母も鏡へ用があり
足並みが揃はぬ譯は金満家
何んにでも報國をつけ見透かされ
腹立ちを言はずに居れば忘れたり
キヤラメルを分けて車中の隣組

兵庫縣御影町 長崎 柳秀

驛前の地代が惜しい大廣場
買ひ溜の慾は子供の出来てから
モンペイのよれば男をこきをろし
境内で經木書いてる御達筆
阪大名譽教授の辭令を拜受して
お光りをあけて鴻恩お眼にかけ

神戸市 潮田 明坊

年下を課長と呼んで不惑過ぐ
不惑過ぐ小吏のまゝに氣がひがみ
行儀よく女房行水でも坐り
留守番の門に出て見るよい日和
注ぎこんでやればいゝさと育てゝ
豫算生活へ鰯の値が上り

湯原 温泉

河原風呂月を感謝の瞳で仰ぎ
今日の話にならぬ相談所
左遷からこちら釣り竿持ち慣れる

布哇の川柳部隊

一浪・北海・風竹
友郎・伯樂・XY生

鳳梨の尻

高澤 一浪

此處常夏の島ハワイ、オアフ、
ワヒアワは台灣の最南端と同緯
度なりと學者が言ふから相違ある
まい。氣温は最低五十度最高
九十度だから年中シャツとパン
ツで暮らせる。そして鳳梨の發
祥地で、能く外國から視察國が
来る。鳳梨の實は尻の方が美味
で、頭部は劣つてゐる。それか
ら尻が太く頭の小さきものは味

矛盾だらけ

前山 北海

三年契約の出稼でスタートを
切つた布哇同胞の歴史もはや五
十五年となつた。
駐在所のお巡りさんがク三年
辛抱したらきつと歸るんだよと
と説き聞かせた聲は今も耳に残
つてゐる。親子水盆を交した別
れの光景もはつきり眼前に浮



しい。
一生懸命に
辛抱貯めをし
て三十何年振
りで郷里へ歸
つた今浦島の
隣の夫婦は、
お金を使ひ果
して子供を運
れてすこゝと
布哇へ戻
り、とても日
本ぢや暮らせ
ぬといつてゐ
る。子供はやつぱり布哇がいゝ
といつてゐる。無理もない、子
供にとつては布哇は生れ故郷な
んだ。
どうかして一度立ち歸りで日
本へ行つて來たい。斯うした氣
持ちではなかなか遠大な永住の
決心なんかつきかねる。子供は
どんどん太つて行く。吾氣な布
哇にも就職難の聲を聞く時代が
した。何時までも樂園だと樂觀
來てゐたら、今に食へん様にな
る悲觀時代が来るやも知れぬ。
はつきり腰を据へねばならぬの
にどうも腰がふら／＼してゐ
る。
娘は洋装が手輕だといふのに
母親は紋付着た日本髪で嫁入り
姿を見せてくれと娘を困らせ、
花嫁に簪笄の一桿は持たしてや

アロハ淨土

(ハワイの異名……洋ヒのパラダイス。太平洋上の
十字路。アロハランド。常夏の島)

古川 風竹

南海の現世極樂名をハワイ
七寶の珠を聯ねた八つの島
阿彌陀經、佛說淨土そのまんま
常夏の國鳥歌ひ花笑ふ
十字路を天の魔地の魔素通りし
睦みと善男善女四十萬
いさかきも解けてアロハと手を

記念だよモンベ姿を撮しきけ
買ひ溜かその婆さんの手にあまり
橋の名で下車大阪の知己を訪ひ

今治 長野 文庫

母親の赦さぬ理由易に依る
女四十ほんこの様な嘘が言へ
古着屋の御似合ですはチト可笑し
未亡人蒐集の苦を知らず賣り
働らき人葬儀の外は厚司なり
軒店を出して居る男地所を買ひ
あのまきに撰んだ道が今日になり
歸還して腰の低さも小あきうぎ
刀剣を語り斬つたを仄めかせ
闇自白して居る様な家を建て
かけ引のなき取引に興薄し
征つた時の旗を下さぬ親の情

愛媛縣 今川 柳影

赤穂嬉しく肩を叩かれて
軍服は番頭さんの型でなし



布哇捕物帖

藤井友郎

凡そ世の中に呑氣と言つてよい
いか、無責任と言はうか、ハワ
イの巡査程いゝ加減な存在はあ
るまい。怪しい奴がウロウロする
から早く来て呉れと警察へ電話
をかける、ノコノコやつて来る
のは大概陽も高くなつた翌朝
に相場がきまつてゐる。頼りな
い事おびたゞしい。

先日もある所で鶏が頻りに盗
まれるので、恐る／＼警察に出
頭してお上の御威光で何とかな
るまいかと敷願に及ぶと、それ
は近頃怪しからぬ話ぢや、キッ
トお上の手で其曲者を捕縛して
遣はす、されば早速今夜からボ
リスを出張させる程に安心して
寝よと有難い御説にテッキリ犯
人捕縛と思つて喜んでゐると、
豈計らんや亦々鶏盗人に五六羽
をしてやられ、彼氏、怒るまい
事かかん／＼に怒つて警察に抗
議を申込むとお巡りさんの返答
が振つてゐる。鶏番に出張した
〇〇巡査は昨夜十二時が彼の退
應時間だ。夫までは鶏盗人らし

私の不平

綿元伯樂

水盃で別れを惜んだ時代に我
等の先輩は懐しい故郷の山水を
後に「バイオニアー」として勇
躍布哇に渡つて来た。其處には
赤白黄緑かな草花や、晴れ渡る
碧空、澄み切つた月が彼等を迎
へたであらうがそれにも況して
炎天下の過激な労働に心身共に
疲れ果ててもなかつた。

斯くて吾等の先輩は五十有餘
年、孜々として働き、凡ゆる迫
害にも拒げず難關を突破し今や
牢固たる經濟的基礎を築き上

ある故國の人々に對し大なる不
平を感じるのである。
故國朝野は擧げて新體制を整
へ東洋平和確立に邁進し一方南
に北に拓土を送り、國力發展に
努めつゝあるの秋之等拓土の將
來を想ひ、平和の戰士を遇する
の道につき故國人士の覺醒を促
したい。然かも折に觸れ排日の
袋はジリ／＼としめられ在留同
胞日常生活上にも不快な事が起

布哇不朽洞會員の横顔

X Y Z

高瀬一浪氏 ワヒアワと云ふ田
舎に女婿と共に鳳梨を相手に暮
らしてゐる何と云つても布哇川
柳界の旗頭であり、女に關する
川柳では相當認められてゐる。

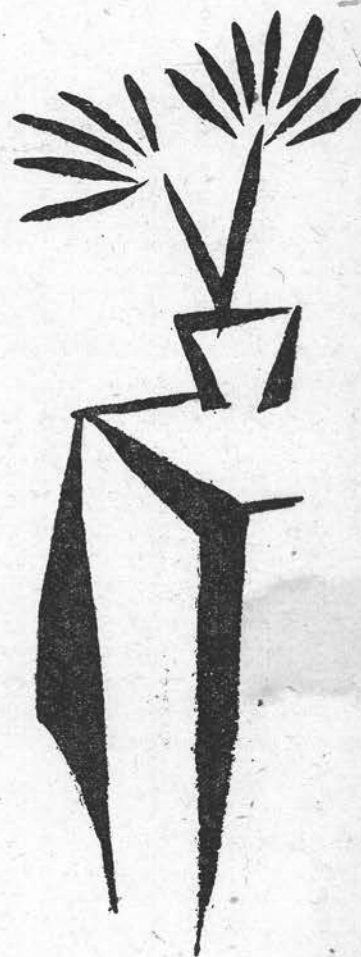
毎週二日間の休日を利用して三
十哩の道を遠しとせず紅い灯を
したつてホルホルに出張して女
の研究に没頭するあたり還暦を
二三年前に済せた人とも思へな
い。趣味としては植木、酒は日
常は用ひないが飲むとなると相
當なもの。

古川風竹氏 日布時事社副支配
人兼廣告部長と云ふ暇のない體
で川柳だけは忘れず精進してゐ
る。氏の氣の早い事は有名で、
自動車の運轉もその氣の早さで
物にならずあつさりと言めてし
まつた。今年で結婚二十五周年
になるので結婚記念に句集を發
行する計畫だそう。以前野久
坊と號してゐたほどベニスボー
ルはとても詳しい。松岡外相は
英語で寢言を云ふさうだが風竹
氏は辭ふと必ず米國南部のニグ
ロの民謡を口ずさむ事は有名で
ある。

前山北海氏 氏は新潟縣で天領
の産として大に意張る。勉強
家日本、米大陸で發行される
柳誌は殆んど目を通す、新聞記
者をよして會社支配人となつた
りした事もあつたが矢張り元の古
巢が一番住みよいと見えて又今
頃では記者生活に歸つてゐる。
自分の自動車に大辻司郎君を乗
せて運轉中衝突してあの大男の
大辻を一時氣絶させた經驗があ
る。

(カツト寫眞はホルホルのアロ)

選郎路生麻



愛からも抱擁から見すてられ

同

丸停のゴム印を押す倉庫の灯
同

伊志田孝三郎

本日は川柳とは？の會、只今迄諸氏の洵に御造詣深く御趣味豊かなるお話を私も共に拜聴させて頂きました。處で淺學非才なる私の申し上げるお話は寧、詭辯に屬する様なことで甚だ笑へる様な事ですが是れも今日のこの川柳のお集りの内の餘興として御寛容を願つておきます。私は茲に川柳の語源を一寸御話ししますに就て引合ひに、都々逸のお話をします。斯様申しますと、どうも詩人の皆さんのお集りの席でその高尚な御趣味の引合ひに都々逸だなんて少し皆さんの自尊心を傷けるやの感があります、一口に都々逸と申しましても維新の頃の志士が作つた歌詞だと申されてゐるものが巷間で唄はれて居ります事も皆さん御承知のことゝ存じます。

例へば

號されてゐたからこそその名稱であります。甚だ偶然乍先生は誠に我々川柳家にとつて好い號を名乗りになつて趣味道に處されたと今にして私はその事を仕合せにも存じてゐるのです。舊來、俳號など申しますものは或程度、否その多くは各自各人の自由、否その多くは各自各人の自由に附け得られるもので絶對的な規則といふ程のものはないものであります。そこで寛政二年にお生れになつて寶曆、明和の頃選者として其頃は點者と申され相すが起たれた先生が柄井路郎と號され様と、假りに鶴花坊と名乗られ様と角戀坊と號され様と、宣敷かつた譯けであります。先輩諸氏のお名前をここに例に出しまして甚だ無適當で失禮では御座います、が路郎氏は本川柳雜誌社の御主幹であり、事皆様御承知の如くであり、

井戸の蛙と誹らば誹れ
花も散り込む月もさす
苦勞する身は何いとはねど
苦勞仕甲斐のあるやうに
あります。

市食ふとんか
孝
店
湖
同
孝地法善寺境内

ら長唄、短いから端唄小唄といふ様な名詞と異り、都々逸坊仙歌といふ人が一流を成して大衆のものとなつた結果、都々逸と言ふ風に成つたと言ふことです。川柳なる語源もこれと等しく、柄井八右衛門先生が川柳と何の趣味だ。僕は此頃、けんかぼうをやつてゐるよ。それはどうも活潑だな、やつとうの方か、それ共拳闘の方か、どうも少し物騒だな。違ふ違ふ。昔柄井劍花坊とい

勞働の尊さ蟲がないてゐる 同
夕立へそのままで置く金魚鉢 市川童顔
商賣がいつそ物憂い京の街 同
年甲斐もなく妓の齡をききたがり 同
釘拾ふ子供心に 時局 同
圓滿な意見で伯父の二重あご 同
貧乏のそのはじまりに他人の判 名古屋 鈴木可香
遅刻する道で故郷の友に逢ひ 同
神様がきつと見てます泣黒子 同
自稱華族スバイと知れてそれつきり 同
懸涯を貰つて来たよ何處へ置こ 同
雨小さく迷子の着物濡れてゐず 愛媛縣 上甲可洲
草紙にも個性を見せ長女次女 同
蜜蜂に銚後の一人教へられ 同
神となる夫へ遺兒へミシ踏む 同
北白川宮永久王殿下戦死遊ばさる 同
日本の強さはこゝに有りと知る 大阪 夷一笑
興亞の礎尊きに泣く 同
國訛りなほらす母の老ひたまひ 同
こほろぎよ僕をセンチにするのかへ 同
名月へ眞直に立つ曼珠沙華 愛媛縣 在間小樓
美しい瞳だったね第五列 同
男子志を立て支那語の本を買ひ 同
日獨伊同盟なる 同
同盟に海の彼方のあわてよう 同
統制の組合計り多く住み 大阪 藤井桃園
夜釣の話でその日の事務終了 同
英男戦病通知に 同
たれからと無く氏神へ朝詣 同
行けるなら看護婦にもと妹達 同
子ら頑健 同
滑り臺スフ混紡の嫌ひなし 大阪 山本三巴
新體制讃仰 同
一億一心一蓮託生聖代之千字文 同
鎌足の捧げし脊に日が映えて 同
日本に貧者必勝の秋が来る 同
キリギリス親の命日など知らず 山口縣 三原狂路
秋だ秋久しく書かぬ原稿紙 同
赤トンボお前も秋の中の色 同
貧農の空を見上げる眼がきれい 同
東京も知らず銀座を口に出し 布施 小谷華素兒
地下鐵は小説からも古がられ 同
林檎箱八百屋こすつて出して見せ 同
同窓の出世眩しく讀んでゐる 同
ばんざいの片方の手は捨てゝきた 大阪 今西鼓愁
手の裏を返したことも金のため 同

の御辭世と稱される
木枯やあとで芽を吹け川やな
さ

の一句に對し先頃來、古句研究の諸先生方が初代柳翁自作句否定論を御發表せられ種々なる議論が交された一事であります。各論共拜見致しますと洵に論旨堂々、我々が謹聽する價值充分なるものがありました。但し、元來が辭世など申すものは其殆どが人の世を去るに及んでの振り返る一生の述懐と云ふ、又はいまわの際の、あきらめ、いつた様な辭句が多いものであります。然るに川柳翁の、それは、決して左様な類のものではありません。あとで芽を吹けの七文字は、斯道隆盛の希望であり願ひであり、今にして思ふ我等この道にいそしむ者にとつての尊い祈りでこそあるのです。この句そのものが、よしや柳翁の御作でないにしろ、柳翁の御心は必ず必ず其處に在つた事を信じて私は疑はぬものであります。此道歩んで倅せな私は柳翁にこゝろから感謝せねばなりません。

今や秋、まことに詩作に宜敷き秋です。お話が一寸横にそれますが私は東の方の人間の故か片瀬、葉山、腰越邊りの秋の風情が今頃になると思ひ出されて

ルービヒサア

社營式株酒麦本日大

ルービヒサア

大日本麦酒株式会社



北支那の父にあつてゐる子の寝顔
國策に沿はず馬派手な服
嬉しそに王手々と子の将棋
孝行な子とも思へず十八九

防空演習

官舎の奥様モンペでまたすまし
縄飛びもしたい娘婚期もう迫り
自惚の今日はあはれな程沈み
妻の留守何にがつけて腹が立ち
出征の作にすまぬ靴の艶
そちに似たあなたに似たといふ
氣位は高く俗人ばらに負け
市になるといふ日矢張り島に出る
やめといふ謎か仕事を減らされる
かなしいねモデルが猫に見えるんだ
さぶとんを敷いて静かなる夫婦
添ふたらきつと君をぶつたらう
働く手産れた儘の型崩れ
祖母と寝たのより先覺でない
揃ふ手に近づくと秋の水の色
コスモスの下にシヨボリ轉校生
一日をさへてくれた靴を拭き
見そめたは尻おつたてたふき掃除
暇なのがラヂオの前へ床をとり
六十を越えたと思ふ母を描き
説教師新體制のはしにふれ

糸繰乙女

神代から傳ふ誇へ糸を繰る
アメリカへ賣るとは聞いた糸を繰る
糸を繰る湯氣たちこめて粗衣の肩
物價高き使ふのまで教へ
茄子、胡瓜、糠まで親の有難し
割引に合し時報にまた合し
尺獲が化けてる莖も風があり
支那の屋根どれもお寺の様に反り
黄日照草、ビールの口金撒いた様
代用品重き使命にたぢろがす
貧故に正しく生きるのをかし
畦水にさへ緩急の面白さ
清貧の中に生れし子の未來
類の覺武動を見よと言ふ如く
七々に觸れてる姿冷視する
産み月のすけた榮養表が張る
産み月の覺悟出来ては切符制
欠航へ一ヶ所開けた待合所
同僚へ見合のことも女店員

友人結婚を祝ふ

雪國で新體制の新世帯
付添の身の上話きく日なり
大自然蛇と蛇とは仲が良し
すすみな金糸銀糸のよに光り
就職のテストへボール投げさせられ

父母生きて在し柿の荷がとき
世話をして世話にあらず母のまめ
一瞥をくれて長者の門を過ぎ
遺骨つづいては静かな兵の家
半生の貧しさを見る寫眞帳
同盟の今日は一面ばかり読み
菊白く洗濯物に餘念なし
隣組時に託し面を白く
功無きを愧ぜぬと歸還のたのしみ
辯解をせぬと心になつて行く怒り
笑つては済まない妻のモンペなり
罰金を又難費かと記帳する
媚養子愚鈍なところが氣に入られ
世群上手かくて萬年受付子
軍國の父嫁の手で息をひき
禁止令何にあわてた母と娘よ

代用食にウドン

食堂はうどんをすする音しばし
寫眞班口を開けてるところで撮り
氷囊も掻き除け暫し窓の月
屋上の月へ看護を呼び来る
香水の匂ひ見舞の客が来る
死におくれた蚊が病床の肌へくる
歸還して街の灯いたく眼に沁みぬ
女・女やはりモンペの柄も言ひ
大空の蒼さへ孤獨まけて居た
婚期すぎ服も疲れたタイピスト
叱られた氣持は出へしやがんで
妊んで歸つて村人と物言はず
網棚のひかん旅行がしたくなり
佛滅に遊びに行つて雨になり
遺家族の覺悟自活のミシ踏む
酔うて來て父は物價の話する
浅ましきところをみせて辛く逃げ
ドクトルに責任者側おどかさ
死んでゐる支那兵傘が大事そう
軍便内職の灯に圍まれる
かてきぎ並んだ露路をぬけて

一〇〇號記念三越にて

實演のこまこいとこへ氣を使ひ
映畫をば論じて親子の恩
責任のなれ日曜の掛時計
もう悲劇ない切つてゐる記者なり
アベックの戀仲でない悲哀あり
軍服を着れば日給とは見えす
スタートの子へ母親は眼を反らす
祝日獨伊三國同盟成立
征け銀翼この空獨伊と同じ空
仙人掌の強さへ人は教へらる

秋季運動會

仙掌の強さへ人は教へらる
征け銀翼この空獨伊と同じ空
祝日獨伊三國同盟成立
スタートの子へ母親は眼を反らす
軍服を着れば日給とは見えす
もう悲劇ない切つてゐる記者なり
責任のなれ日曜の掛時計
映畫をば論じて親子の恩
實演のこまこいとこへ氣を使ひ

なりません。同じ地方の鳴立澤
の行きづりに西行法師は
心なき身にもあわれは知られ
けり
鳴たつ澤の秋の夕ぐれ
と詠まれました。毎年今頃にな
ると妙にこの歌を思ひ出される
私の大好きな歌であります。け
れど西行は果して、心なき身、
であつたのでせうか。否、これ
は誰でも答へる即答でせう。一
入しみくとする鳴立澤邊りの
風情、秋の夕暮れを待つ僧は身
も心も枯淡そのもの、西行法師
であつたのです。名歌は偶然生
れたものではありません。如何に
風情が美しく共びしく共、牛
を追ふに忙がしく草を刈るに餘
念なき詩情なき人々には、名
歌となる迄の物のあわれは仲々
に感じ得るものではありません
まい。

歌辭、お耳を汚しました。

酒會館に於て十月例會を開催し
た。

▼川維柳支部は十月二十六日午
後六時三十分より高須神社々務
所に於て創立會を開催。本社
より路郎主幹をはじめ須崎豆秋
氏、戸田孤蓬氏も出席され、柳
話並に兼題選を擔任された。

消 息

▼長崎柳秀博士は十月一日の文
部省辭令で帝國大學令第十三條
により勅旨をもつて大阪帝國大
學名譽教授の光榮に浴された。

▼故酒井大樹(松山)の夫人と令
嬢が十月十日來社された。當分
尼崎に滞在の由。

▼長門の秋をたづねた伯
峯・紫浪・彌山・かなめの諸氏
より十月十九日附のよせがき到
着。

▼魚住滿洲氏(大阪)は體育獎勵
のため十月六日御子達を連れて
奈良から笠置山へハイキングに
行かれた。あまり良いお天気の
ので若草山で書きすぎまで寝そべ
つたおかげでこれは寝すぎたし
くじつた現さんとなり、後は乗
物のない廿五キロの道をかけ走

柳 界 展 望

全國川柳界のこころ各地川柳人の一舉手
一投足を此展覧會でぐくむる様にし
たい皆様の御通信を歓迎する (巻)

催

▼川柳雜誌社主催の日獨伊三國
同盟祝賀會は十月五日午後六
時御津八幡宮に於て開催▼松坂
俱樂部麻生路郎川柳講座は十月
六日、廿日午後一時▼有恒俱樂部
有恒川柳會は十月十日、廿四
日午後六時▼住友親友會尼崎小
集は十月十五日▼川維城南支部小
集は十月十九日夜大研子居に開
催▼阪大川柳會十月廿日午後四
時以上何れも路郎主幹出席
▼川維今治支部會は十月十日
文庫居に於て開催。

▼川維廣島支部は例會を九月二
十七日、廣徳俱樂部に於て開催
▼川維岡山支部は十月十九日禁



損をしてまでも賣らぬと八百屋云ふ
血脈の知識老ひたる母があり 大阪 山本葉光
母と寝てきく古里の虫 同 松井静子
伸縮も自在にできて特許権 名古屋 高木満山
純だつた友も變つた場末の灯 同 尾崎緑柳
逆夢を強ひて思うも自己慰安 新義州 八幡勿來
迷信もそのまなざしに笑へない 同 藤森小雅子
べらんだに看護婦天使めいて立ち 名古屋 堀毛一龜
君來てはくれず秋の日澄み渡り 同 尾崎緑柳
債券が當れば奢つて上げませう 大阪 堀毛一龜
金策を斷る筆に友のかほ 大阪 堀毛一龜
松葉杖頭を下げて下さつた 神奈川 尾崎緑柳
興亞國民總動員大會に
皇帝陛下の臺臨を仰ぎて
五萬人唯肅として咳も無し 新嘉 中村對州坊
國都ベスト流行に際し
三十萬マスクに防疫の意氣を見せ 同
ベスト禍に國都不安の夜を明し 同

川・柳・書・架 (七四)

朝鮮風土俳詩選

津邨瓢二樓編

▼本書の題名は朝鮮風土俳詩選であるが、内容は川柳朝鮮風物集と云つた風のものである。川柳を拾つて川柳の名を冠せないところ、本書のために惜しむ。

▼(前略)「日韓併合、内鮮一體既に三十年漸次消散し行く朝鮮の匂ひを何かの手段方法で離脱して置く必要? も考へたからです」と「編者のことは」の中に言明されてゐるが、寧ろこの意味に於て本書の刊行は有意義である。

▼昭和十五年八月二十八日印刷、昭和十五年九月一日發行、四六版二九七頁、非賣品、二百部限定、發行所京城府東四軒町三八ノ三一津邨連翹莊

大連の父より
子供をば連れて歸へれと電が来る
同盟にあはて出したる英と米 同
引越へ寄つてたかつた隣組 下 國弘半休
淺漬けがこんな美味い病上り 岐阜 藤井紫風
あたふたと暮れる都會の辻のゴミ 大阪 武部香林坊
廢物利用教へられたり教へたり 失 名
病める子はブルの水へ指を浸け 大阪 公木示右
不自由はないが機嫌取ももうつらい 堺 村上角堂
歸還兵動作正しく話しけり 四宮 花柳蘭子
思ひ出は馳る麥笛吹きし頃 廣島 石原伯峯
歸郷
デパートの菓子畦豆と換へて来る 尼崎 小林文月
親と子が新體制の朝を出る 大阪 中西彌生
國策にそはぬ事のみ目にうつり 上野 佐二木千隈
夕立を待つ氣でニュース這入つて見 神戶 新聞 透木
柄にない聲はありあけるコロロギ氏 和歌山 保井善堂

川柳忠臣藏

古川 風竹著

▼本書の巻頭に、著者風竹氏、高澤一浪氏、前山北海氏の序がある。

▼一浪氏の序の一節に(前略)「皇紀二千六百年の佳き歳に大兄が武士道の精華赤穂義士の快舉を川柳化して出版されることは極めて意義深きことと信じます。ウイロー社の草分たる貴氏のこの企は永くハワイ柳界の金字塔として残ることでありませう」云々。

▼著者の「前がき」には「日刊新聞といふ年中ひまなしの職業で飯を食ひ、ク市販出して便所に句を拾ひクの境地から、でつちあ

りて驛へ到着する途中で月がでて、次の發車まで約一時間虫の聲を聞いて居たとか「笠置山月がうごいて顔へくる」とは其時の一句。

▼十月二日大森風來子氏(廣島)と清田田鶴子さんは勤務先よりの歸途乗車中の電車が發火し火災を生じたるため大混亂を來たし、田鶴子さんは三週間の負傷、風來子氏は肩間へ負傷をされた。

▼岩崎松代さん(張家口)は十月十三日來阪され不朽洞へ一泊された。

▼庄万よし氏(大阪)は十月十四日下田港より「二代目のお吉に會はぬ湯のあふれ」の句をよこされた。

▼淺野慈介氏は七月から樺太へ出張中、十一月には歸神の由。

▼大森風來子氏(廣島)は十月十六日不朽洞を訪問、歸途石浦征野氏方にて一泊歸廣された。

▼蛭子省二氏(朝鮮)は内地旅行より歸阪され、さしたる旅のお疲れもなく各方面の御通信おさく「おこたりなき御健筆は羨望の至りである。

▼富本無煙氏(大阪)は昨年七月病を得同年十二月より郷里淡路島で静養中であつたが恢復後一時歸阪され再び淡路へ向かはれた。

▼森本秋子様(寶塚)は八月下旬

★社告

▼左記の通り不朽洞會へ入會された。

大阪府 米本貴志子氏
営業部 宮本登美子
寫眞部 福井 哲

轉居

▼森東魚氏は中華民北京内二區新平路二號組北支店へ。
▼奥田線翠氏は尼崎市西御園町五十番地へ。
▼小川百雷氏は大阪市西成區南神合町七番地へ。
▼岡田某氏は神戸市灘區森後町三丁目一八番地へ。

慶弔

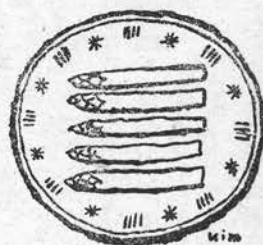
▼月原省明氏(愛媛縣)は○月○日無事歸還され、目出度華燭の典をあげられた。

▼長松山山氏(東京)の御令聞ハナ子さんはかねて御病氣であつたが十月十三日遂に逝去された。謹悼。

水虫新治 療劑 セイボ



ミツムシ シラクモサ ハンキン ケン
一町野平區東市阪大
部藥新松井白 元賣發
番四八六六六阪大替販



愚談

小畑自由朗

お爺さんとお婆さん

お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に、孫は大きな期待を持って其の歸りを待つと待ち侘びて居た。

やがてお爺さんは柴を荷なつて汗だく／＼に、お婆さんは洗濯物を抱えてやれ／＼と戻つて来た。

孫は、がっかりとした様に、ぼそ／＼と蜻蛉つりに出かけて行つた。

賽銭箱

隣のお婆さんと私とが、町内のお稲荷さんの當番に當つたので、賽銭箱を開けて見ると、一羽の小雀が乾んから乾んに成つて死んで居た。察するに、腹がへ

てから間もない彼女は、孤獨を

無念

今を去る十數年の昔、結婚してから間もない彼女は、孤獨を

愛すると云う素氣ない夫に腹を立て、一人で漫歳を見に行つた。田舎出身の彼女は、其頃まだアイナラエー華な漫歳だつたが、あつた腹の立つ夫のことも忘れて仕舞う程面白かつたので、ラ／＼と夢中に成つて居ると、隣の人がグーッと来たかゝつて来てついでにギューツと手を握つた。其んなことに未だ經驗のなかつた彼女は吃驚して、小屋を飛び出してあつた家へ戻つてハア／＼と息を切りながら其由を夫に報告したのであつたが、ほんまかいと夫はまち／＼と彼女の鼻を見つめながらうたがう様に云うのであつた。

彼女が、依然として孤獨を愛すると云う其のド變屈の夫を無理矢理に引張つて、或るニュース館へ這入つたのであつた。さうして満員の中にもまれ／＼て居ると、隣の人がグーツと来たかゝつて来てギューツと手を握つたのである、彼女は、そつと夫の耳に囁いた、あんな、隣の人があての手握つてはれまっさ、ほう／＼、と夫は不思議さうに、さり氣なく、其の有様を探つて見た、成程、たしかに握られて居る。なあ、ほんまだしやろ、と彼女は得意然として又さ／＼やいた。それから外へ出てから、ものづきな人もあつたもんだんな、と彼女は云つた。而しおまつ、あんなおつさんではしやあないやないかいと夫は云つた。

でも、十年程前に握りやはつた人は、もつと若い／＼きれいな／＼人でしたと彼女は、ツーンとして、あてちよつとお友達のうちへ寄つて歸りまっさかひにとグイー、と横丁へ一人で曲つ

今と昔
「大間はんて、たつた三尺九寸

腰を落ち着くべく餘儀なくされた日本人は、盛んに學校を建てた寺を築いた。此の時代によく學校騒動が起り、寺に紛擾が醸された。何れも止むに止まれぬ政治熱の現れであつた。日本人は盛んに團體を作つた。青年會は日本人會となつた職業團體が生まれ、同郷人會が雨後の筍然と出来た。團體は又政治熱を充分に挑む向きの處である。地方で日本語學校の學務委員長になれば、日本の田舎で村長になつた様な格式である。

町で日本人會の會長ともなれば、先づ日本の町長位に幅が利く。凡人の慈しさ、かうした團體の役員となり、理事の末席でも汚す様になれば一廉の有志になつた氣持になるのはやはり人情である。むく／＼と人並みの政治熱が頭を持ち上げ来る。役員選舉には進行運動でもしたくなる云ふものである。

布哇の日本人社會に數え上げた

參政權の無い日本人

前山北海

ルルノホ

布哇開拓の恩人と稱すべき日本人が、布哇王國の招きに應じて官約移民として遙々三千里の波瀾を蹴つて布哇渡航を敢行した明治十八年の頃には日本には普通選舉

の話なんかつとも無かつた。明治三十三年に布哇が米國に併合されてから東洋人として歸化を許されぬ日本人の子にも生れながらにして市民權が與へられた。親は政治に干與されぬが、丁年に達した子は選舉權を行使するし、被選舉權もある。縣會議員にも當選し、郡參事として郡政も切廻す時代が來た。日本でも普通選舉が行はれ、一人前の男子には何れも公民權が與へられた。婦人參政權すら喧しく叫ばれて來た。布哇では既縣會議には婦人の上院議員と下院議員が幅を利かせる世の中と變つて來た。

政治熱縣人會を弄び

Sato Special Klinik

呼吸器病科

内科

診療時間
午前 午後
日曜 祝日 休

佐多愛彦
加藤謙一
螺貝四郎

電話 151

市電中島町停留所北西入

佐多醫院

大坂島北町 電話 八二四八



募集句

一路集

鯛 東魚選

乙姫の次の器量は鯛になり
級長になつた子の膳鯛がのり
鯛釣れば太平洋の風すざし
大鯛へ今日喜びの灯がともり
鯛買つて明日は作が還ります
鯛の鯛出して舞妓の嬉しそ
鯛持つて来たを掛取り見て歸へり
全快へ鯛の刺身が噛みきれず
鯛へ目を伏せて花嫁静かなり
鯛釣れず妻のイワシに迎へられ
祝杯へ膳の鯛みな躍りそう
大鯛を貰うてこまる新世帯
陰膳と聞いて魚屋鯛をまけ
全快を待つてたように鯛が跳ね
店員に赤紙が来た鯛の膳
お祝の鯛はいはれを手に聴かれ
鯛の尾の上げやうがある木綿糸
芽出度さを思ふ鯛の大きな眼
鯛網の之を喰ふかと惜しまれる
病人に鯛の刺身の値をきかれ
随分と曳かれた話一尺鯛
焼物の鯛送り膳値ぶみされ
鯛さげて勝手から来る里の母
鯛の膳征く子にうれし勿體なし
目出度さは日本だけの鯛が居り
歸省子のみやげ母へは鯛田畝
水族館ほんとうに鯛生きてゐる
日本鯛日本の味がする
蝦で鯛釣れて進物調進所
大鯛を前に當選最される
選の選延を授け家諸君並びに編輯者にお詫
び致します。今般勤務上の都合にて渡支、
北京の旅舎に於いての選であり、流石に一

種云い知れぬ感慨に打たれて居ります。(東
魚生)

(軸)日本の色だなど云ふ鯛の色

古道具 五健選

古道具粗末に出来ぬ時世なり
煤拂ひためた古道具に呆れ
禁令に古道具屋も惱み出来
準國寶目こぼしておる古道具
古道具でもイ、一つ揃へたい
古道具の間に佛像偉人像
古道具逝つた娘の年を繰り
古道具に逝つた娘の年を繰り
賣る事にきめては惜しい古道具
あれば家寶賣れば何しろ古道具
古道具何時も變らぬ場所におり
通譯と来たへ道具屋庭へおり
道具屋も趣味を持つて賣り惜しみ
アカンと思ふ古道具屋座つたま
由來つきで古鐵瓶が贈られる
御先祖の秘密知つて古道具
整理する氣にも成れない古道具
古道具手にとつて見て繪が判り
舊城下掘出物もあるといふ
賣る時に惜しんで見せる古道具
今出来の品ではないと出して見せ
緑青が自慢半端の古道具
古道具妻の顔まで老けて見せ
古道具親父の顔に似て座り
古道具屋の座敷へ小さく座られ
古道具の様な身體と自嘲する
古道具先祖の趣味が思はれる
秀 透
古道具判らぬまゝに艶をほめ
落札の値を喰はれる古道具
先代の手垢もついて居る道具
古道具屋へ賣たタンスを見に行き
古道具値札の紙の白いこと
(人)これがこう光つて道具捨てる
(地)古道具おれの先祖は大工かなア
(天)道具屋を呼べば猫の眼も淋し

臨終 水客選

臨終に醫者たゞ脈をみる許り
臨終へ女は泣きに席を立ち
臨終の模様、妹の便りくる
臨終は俺の意志だけ繼いでくれ
臨終へ私生子父の顔をみる
臨終のクリスチャンがお念佛
臨終の母に意外な人が来る
臨終と知らず隣の子澤山
臨終の父へ不幸な二十年
エンヂンの音臨終をハッとさせ
臨終へすまなく戀の二人ある
臨終と知つて隣の聲低し
臨終に擧手の禮して忤来る
十疊を狭く臨終取巻かれ
臨終のもう天井も見あきたか
臨終へ醫者は静かに時計見る
臨終にせつばつた嘘を云ひ
遺言もなく臨終の安らかさ
親切な人へ臨終の貯金帳
臨終へ不幸をわびるふしあはせ
臨終へ一番雞が鳴いてゐる
臨終へ静かなすゝり泣きとなり
千斗
古弗
夢女
透水
ユリエ
北海
一龜
小櫻
新水
青風
春雷
琴聲
角堂
みづほ
太呂
彌生
敏子
華光
同
一笑
同
久枝

佳作

急行車、死目に歸る音となり
臨終の外は秋空晴れてゐる
臨終へ顔だけ出して妻戻り
臨終へ黙つて居ても義理がすみ
臨終へもう葬式のこと食ふこと
臨終の外は寂かに雨が降り
臨終を待兼ねた様に後のこと
臨終へ孫が三十人も寄り
臨終の隣室ははや善後策
御臨終醫師徐ろに手を洗ひ
不孝者派出に歸つて来た臨終
臨終へ看護婦さんの年若し
同
敏子
抱逸
同
波夢造
同
翠芳
同
春巢
同
遠見路
同
風來子

一路集へ出句を薦める辭

「一路集」の作家を見てみると
古い作家で、かなり熱心に出句
を續けてゐられる方もあるが、
概して中堅作家や初心者のため
の特設欄の観がある。
題詠は、古い作家も意
らず續ける必要がある
題詠で型の眞髓を掴む
べきで型に囚はれるべ
きではない。この訓練
を絶えずしてゐない古
い作家の多くは型に囚
はれ易い。この「一路
集」はこの意味で全作
家が出句して句を練る
一つの川柳道場と考へ

べきである。

討して教へられることの多いこ
とは今更言を俟たないところで
ある。
この欄へは特に誰も彼もが出
句するやうお薦めする。
(編輯局)

●何故ムツリニペンは優秀ノ
書きよい……すぐれた技術で造られるから
錆びない……完全に鍍金を施してあるから
強い……機りすぐつた材料を使ふから
廉 價……良品で大量生産をするから

狸

前田五健

高松、琴平間電鐵佛生山驛の南約半キロ佛生山町の南端、丘陵景勝の地に法然寺がある、早く云へば高松から電車では僅かの時間で行ける高松藩主松平家累代の墓所である法然寺の「狸」をこれからお話しせうとするのであります。

當寺は法然上人の創建と傳へ寛文年間高松藩祖松平頼重公によつて再興盛大宏壯になつたもので國寶なども澤山由緒のお寺であります。現當主は知恩院と兼職で高職に在る細井照道師、この照道師の先代であつた住職であり軍醫であり又俳人としても知られた方の著書栗饅頭から「狸の話」を拾つて見ませう。

「お寺の若僧さんはエライ、ノウ、夜半でもお經を上げて居るゾ」

こんな噂が佛生山町から立ち高松へも廣まつて来たが、若僧さん即ち著者の若かりし時は夜半に讀經などは上げた事はな

い。何かの間違ひであらうと笑つて居たが、噂がだんだん高くなり、しかもお經を上げて居るのは一人では無い数人、否な數十人も上げて居る聲だと云ふので、捨て置かれぬ事に成つた。

「昨夜調べて見ましたが、誰れも居りませぬ」

「こりや瀝りに食つては成らぬぞ」
「わしは護法の狸じゃ」
この話が洩れるとも無く洩れて結局、法然寺の狸はお經も讀み、御供物守護や火の用心もする、エライ者に成つた譯です。
又先代が大正十二年大震災前後の事、同寺で病院を設けて居た時、
「先生昨晩はお隣の病室で大變面白くお話を居られましたな」
「そんな事ありません昨夜は書齋に閉ぢ籠つて病室の方へは廻りませんでした」
「デモ隨に先生のお聲でした」
此の話を次の病室ですると先生は夜半にお見舞下さつて、お茶は召さずにお菓子(栗饅頭)を包んでお歸りに成つたと思ふ話に、
「ハテナ、此の私に相違ありませんか」
「相違ありません」
「ト、すれば此の私は誰れだらう」
この傳説院長さんの廻診も矢張り狸でした。然し投薬だの注射だのは一切せず、たゞ漫談をやつて、お菓子を食つたり、包んで貰つて歸る、イ、精神慰安院長でした。

法然寺先代の著「栗饅頭」には以上の事が面白く掲載されて居る。
狸傳説の「稚氣と禪味」蕪村の句
戸を叩く狸と秋を惜しみけり
も、こんな狸なら大いに話せる譯です。本年九月號の文藝春秋誌に本位田經濟學博士が狸に出遇つた話を書いて居られたが、「狸はユーモリストであり日本式であり川柳式である」様に思ふ古今日本刀談集の國廣刀で斬られた狸仙狸などは俳句も作つて居た。法然寺の狸も住職が醫者であり俳人であるから、うまく勸めたら俳句も川柳もお經の如くやつたかも知れない。
さて再び高松の銀座街片原町の華下天満宮の御境内に照宮を奉祀されて居る梅光、金光、清光明神(狸)に話を運びます。
昔原道眞公が讃岐の守として派遣され瀧之宮に居を構へました此の瀧之宮は瀧川の上流で崇徳天皇の御製にある「瀧をはやみ岩にせかるゝ瀧川」の瀧川で道眞公にお供して讃岐へ渡つたのが、梅光さんだと云ひ傳へられて居る靈媒の聲を聞いた人の話では女と云ふ事です。そこで夫婦で渡つて来たが夫狸は乗船の砌り海中へ落ち、獨りに成つた梅光狸は妊娠中の子を問もなく産み、それが金光、清光さんで、あると云ふ話。
浪華の浦から渡つて来た狸梅光さんは玉藻之浦のほとり華下天満宮の神樂殿の縁の下に居を構へ、勤善敬愚にとりかゝつたが初めのうちは矢張り狸格の然らしめる關係で癖をよよく起し附近の人々を脅かしたり怖れさせたりしていけない、神主さんに頼むと狸を呼び出して叱りつける。
「コリヤツ此のあたりは皆な當天満宮の氏子じや、その氏子に惡戯するとはケシカラン、追放にするぞ判つたか、ナニ之れから守護する、よし大いによろし」
テナ譯で町内とも相談の上、華下天満宮の入口脇へ梅香、金光、清光、大明神と祀られたと云ふのです、よい事をすれば狸でも祀られると云ふ筋が此の話のネトラヒ所です。

米國の創作家ユー・ジョン、オニールの原作から村山知義氏が翻譯案演出した東寶映畫の「初戀」は物語を高松の老舗○○大藥店に採り筋を進めて居るが映畫の中で唄ふ狸語は「淨願寺の狸」が實際に祀つてあるのは前記の梅香明神一族ださうである。此

の映畫は若原春江が、イ、味を見て居た。
高松では軍裝した狸の玩具を賣つて居る狸もお國の爲め日清、日露、支那事變にもお手傳に出陣したと云ふのである。この玩具を観るとお伽漫畫の「ノラクロ軍曹」を思ひ出す。
讃岐の重なる狸はなしも、これ位にして、伊豫路へ移りませう、新居濱市の「小女郎館狸」王生川の喜左衛門、大井のお袖、松山市では傳説の大關、松山八百八狸等々伊豫路も相當に「狸」は多い。(つづく)



ジープの協川
迎 歡 信 通

★川柳人協會は既に五年前に川柳界の新體制を呼んでスタートを切り、斯界の向上、發展、統制等を熟慮して創立されたものである。今日、國民としての新體制に際会しても、協會の根本方針に搖ぎはないが、更に刷新すべきは刷新して時局について同諸君のいよく堅實なる協力をのぞむや切である。
★森東魚氏、村田周魚氏等も本協會の提唱する川柳會館の設立を切望されてゐる。各種の會合が頻繁に行はれ、各地の柳人が盛んに旺んに往來する今日、川柳會館の設立の緊要なことは論を俟たぬのであるが、川柳人一般の聲が、その機會を招来するまでにはまだ、前途險遠だと思ふ。一層の鞭撻と支援を願ふ次第だ。そして未だ川柳人協會本來の使命を知らない人々は自發的な入會をのぞむ。
★大阪の各百貨店も新體制に呼應しく國策の窓と稱するウキンドを提供。この窓を利用し

會の月一十誌雜柳川

Table with 2 columns: Date/Time and Location/Event. Includes dates like 十一月二日夜六時(土) and locations like 御津八幡宮.

て、川柳、短歌、俳句、民謡、寫眞等を大阪府市精動本部後援關西精道作家協會主催の下に募集することとなり、川柳部は九百貨店のウキンドに於て「節米」二句官製は一人一枚、堀口塊人・本田溪花坊・麻生路郎・岸本水府・森雞牛子の五氏選賞品一等支那事變債券、大阪府廳總動員課内關西精動作家協會宛。
★戦後柳友箱守系柳、島紅石、田村萬龍子の諸氏の靈を慰めるため靖國神社臨時大祭の秋を還るため、京濱川柳有志者主催の戦後川柳家慰靈會が、十月十七日午後五時三十分より東京京橋區豊玉河岸朝日俱樂部に於て開催された。
★八幡市川柳くらがね吟社より

Advertisement for 田中源太郎商店 (Tanaka Gen太郎 Shoten) located in Osaka. Lists products like 純國産 GTC 潤滑油 and 國産 GTC オイル. Includes address and phone number.

理整秋豆 · 郎路

用紙は原稿用紙又は投句箋の事
文字を正確明瞭に記載のこと
開催月日及場所記入のこと
締切は毎月廿五日とす
投稿先は本社宛

21

小さき東髪表彰の列にゐる
薄情は財布の底が見えてから
表彰へ今日ぞ日本晴れの顔
表彰は嬉しき等の手がふるへ
表彰は知事は變つた聲を持ち
椅子を浅く表彰の順を待ち
表彰は捧げ盡した過去に生き
薄情な男が續けさまに吸ひ
殘金の合はない席へお茶を入れ
燈明へ薄情の世を忘れかけ
見本のライスカレーへ蠅が止つゝ
お茶漬をも一つ喰べる秋茄子
表彰は並べて無愛想な店
薄情な男ですく／＼肥えて来る
見本持參の小僧何も知りません
表彰へ田舎から来た下駄をぬぎ
殘金へコップの酒がぬるいなり
天ぶら屋見本のやうに匂はせる

みさごグループ

隨意と書くも矢張り廣告
御隨意になさいと聲が尖つて
レコードの中で小さく小鳥啼き
白粉の花がきれいな避暑の宿
避暑先は持つて来た程讀めせず

川 下關支部句會 (下關)

國弘半休報

祭りの日軒に連なる御神灯
もう一度塗りかへて出る夏祭り
ひとり寝はあれやこれやと想ひ出し
想ひ出を語る勇士の髪があり
想ひ出を平氣で云へる歳になり
想ひ出をビールの泡にかきけされ
明月の下にスパイの眼が光る
ひねくれた墓にも丸い實が育ち
若い母ひねくれた子をもてあまし
ひねくれたのへ同情も腹を立て
貰ひ子のこの子どこまでひねくも
古本や良いところハで見えて歸り
潔癖が古本屋へは寄せつけず
古本の中から古い戀が出た
家計簿にマツチの値段もしるさる
煙草の火外交員がすつて呉れ

田鶴子 柳石 九坡 市多樓 ユリエ 須彌浩 麥作 風來子 三味 久米雄 幽香里 俗菩薩 敏子 伯峯 紫浪 秋無草 露斗 秋史

正晴 賢次 つる 柳月 九呂平 半休 同日 月日 房子 不川 勇記 樂運坊 柳月 九呂平 正春 不川

下女にまたマツチ粗末にした小言
入念にすりかへてゐる煙草の火
仲人はミシン上手もつけ加へ
たつぷりと吞ませミシンへ母直り
ミシン踏む足も素直に娘は内氣
來客をラヂオで氣嫌よく待たし
ダイヤルヘラヂオ十時を過ぎた音
せはしさもみつ豆位はと引つば
みつ豆を食はせる役が汗をかき
商談へみつ豆も食べてみる
みつ豆を持つて床几の月へ出る
みつ豆をにがく食べてる強意見

川 四ツ橋支部句會 (大阪)

九月十一日

中内翠芳報

町會の屯所は子供だけの秋
町會が新體制の意氣を出し
乳呑子を抱いて町會二人ゐる
町會の顔が揃うて秋になり
モンペで出る町會の用が出来
蔭口をみんな幹部は知つて居り
蔭口は大將格で光つて居り
蔭口を聞くだけにする男なり
寺詣り家内揃つて高野山
寺詣り極樂淨土に行くつもり
地獄へは行きともないと寺詣り
極樂へ自分も行く氣寺詣り
寺詣り和尚と話す仲となり
寺詣り交叉點迄送つて來
親緒と偶然に會ふ寺詣り

賢次 九呂平 山彦 不川 市多樓 賢次 不川 光輝 勇記 山彦 市多樓 草路

八百萬の神を信じて落日の身
神様に委せてあると軍事便
闇取引がヤツパリ神を拜んで居
祠にたかきにめぐる引合せ
我輩と云ふ人兎角反對す
我輩は知らんと記者を煙にまき
一枝の木犀部屋を秋にする
部屋頭かつて笑つた事がなし
父歸る部屋模様も替へて置き
部屋からのあかり倅さうな色

川 今治支部句會 (今治)

十月十日

長野文庫報

敬道 文庫 心府 地下水 文庫 鬼外 文庫 心府 美政 鬼外 文庫 心府 美政 鬼外 文庫 心府 美政 鬼外

大部屋に出世を待つて小十年
頼母しく外貨と替る荷札なり

虫供養萬燈會句抄 (箕面)

戰線に燃れた無言の戰士
軍馬・軍犬・軍鳩を弔ふ

幾山河敵屍を踏んだ馬蹄也
臭覺で一步も入れぬ歩哨線
鳩歸り來て一軍勇み立ち
慰問品軍馬に分けるものがなし
第一彈二彈も無事であつた馬
クライマックスニユース軍犬躍り出
ステッキで來ればカマキリ身構
足折つてみて蝗にふびんが出
キリギリスびつこを引いたま逃れ
軍犬も内地の水が呑みたかろ
軍鳩はボツボ・ボツボの沙汰で

松江柳翁忌

(川柳雜誌松江支部・松江香傘川柳會
遷友きんりん會共催)
九月二十三日

於恩敬寺
勝谷山川兒報

今迄の無駄に氣付いた切符制
社長から呼ばれ視線を浴びてゆく
不足など云つては濟まぬ切符制
日本晴舟は生活の爲に出る
合服の戦線思ふ汗となり
部落には難がある勝戦
公私多忙とさ二千六百年
和服着て社長墓口もてあまし
日本晴全機歸還を待つてゐる
立ち直る生活となる切符制
新刊書二千六百年秋求む
日本晴外野の背が小さすぎる
墓の草母念佛でとつてゐる
社長からですと給仕は派手な口
念佛へ無念無想になりきれず
慰問使のカメラへどつしり部長
萬歳の天にも届け勝戦
二千六百年國の姿は富士の山
宮鳩へ二千六百年の陽はうら
呼鈴を押すも社長の指かげん
旅客機と鳥とならぶ日本晴
満洲へ來て合服を着ずにゐる
切符制代用食の腹が鳴り

敬道 向上庵 路郎 同 同 潮花 孤蓬 紫香 同 同 豆秋

日本晴あまこまいこまいこ

川 竹原支部句會 (廣島縣)

十月十五日

堀川芳郎報

大安の日にデパートでスリに遭ひ
下役が災難にしてあきらめる
献金は一萬圓から字が太し
おもちゃ箱一萬圓も二三枚

川 岡山支部創立句會 (岡山)

九月二十七日

丸尾潮花報

産聲はたしか軍刀持つ元氣
産聲を眞似て二三日話し
産聲にバケツの走る隣組
アパートの晝へひっそり閑と産み
仕合せな産聲へ月まんまるし
産聲に父たる責をにぎりしめ
産聲に薔薇の匂ひへ灯が江り
進軍を眞似て四五人豆かぶと
進軍の一步一步にある歴史
進軍を子の片假名が激勵し
進軍へ母の便りと二人征く
嬉しさをつゝむ笑顔の美しき
笑顔だけ見せて娘は窓を閉め
健氣さは君に捧げた日の笑顔
まとまつた笑顔で仲人下駄をはき
交番を煙に巻いて酔うて居り
煙だけ残つた驛へ立ちつくし
二階借今日は風呂ある煙なり
煙突の掃除遠くで子をあやし
お風呂屋を開けば煙突指さされ

なごさ句會 (大阪)

九月二十七日

丸尾潮花報

秋月 細泉 雪春 美竹 競舟 風月 大森 鼓愁 潮花 秀溪

同柳長友北魔風同一鳴白同草友北魔風一
村洲郎海花麗竹浪夕郎郎海花麗竹浪

麻生路郎序 宮本又次跋
京大教授 本庄榮治郎博士 題字

戸田孤篷著

柳 二千六百年史

★本誌一月號より七月號まで連載好評を博した
川柳二千六百年史に、大增補して上梓／

發行所 堺市出島海岸通 不 朽 洞
二丁一八二番地

定價九拾錢
送料 六錢

振替大阪三〇三九二

募集

第十八卷 第壹號課題
十一月廿日締切
(十句以內)

名刺 西田 艸樂選
藏 奧村 丹路選

第十八卷 第貳號課題
十二月廿日締切
(十句以內)

圖書館 麻生 葭乃選
看護婦 北川 春巢選

第十八卷 第參號課題
一月廿日締切
(十句以內)

教科書 塚越 正光選
百姓 魚住 滿潮選

每號募集(每月五日締切)

近作柳樓(續時) 麻生 路郎選
川柳塔 麻生 路郎選
同舟近詠
各地柳壇(會報)

投稿規定

▲投句は本社發賣の
投句用箋、官製葉
書又は同型の厚紙
に各種各題必ず別
紙に認め、住所氏
名雅號を明記する
事。

▲「近作柳橙」は全作
家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句
は不朽洞會員に限
る。

▲各地會報は牛紙判
原稿紙に清記の事

▲文庫は二十字詰原
稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷
書「川柳雜誌原稿
と封筒に朱印の事

▲締切は嚴守された
し。

▲投稿其他につき御
問合せはすべて返
信料封入の事。

定價

一 部 金三十錢(稅一錢)

半箇年前金(特軌號共)壹圓八拾錢

一箇年前金(特軌號共)三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

新定

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十五年十月廿五日印刷

昭和十五年十一月一日發行

第十七卷 第十一號

(毎月一回一日發行)

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎

川柳雜誌社

電話 土佐堀 三八三三
 振替 大阪七五〇五〇番

競 轉 斷 無 禁

新證保育は行刊の誌本
る據に法紙聞

大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地(昭和ビル)

店書捌賣

(大 阪)

參文社 三越書籍部 明文堂 朝日ビル書店

其他市内各書店 (東京) 丸善 東京堂 岩崎松堂 吉岡書店

三味堂 紀伊國屋 三味堂 (神戸) 米田實文館 (函館)

主幹 麻生路郎
贊助員 池澤樂居
長谷川徹
大道弘雄
岡岡直方
片岡平
笠原路生
嘉納純
田中辰
長崎柳秀
長岡半郎
長野晴
藤村作
藤本卯之助
頭原退藏
淺田一
末弘巖太郎

鳥山一歩
 沖島岩三郎
 大谷五花村
 龜井嚴修
 川上三太郎
 米村あん馬
 田村孝之介
 谷脇素文
 高尾敏郎
 生方亮雄
 窪田銀次
 山本雨迷
 安川久留美
 前田雀郎
 柴谷宰二
 篠原春雨
 姪子省二

小	上	中	川	石	戶	大	寺	岩	奧	西	福	高	橋	不朽洞會費	森	藤
烟	倉	島	出	井	田	西	井	崎	村	田	田	橋	本		里	
自	普	生	美	白	孤	八	銳	柳	丹	里	山	か	緣		好	
由	耕	根	子	面	浪	步	々	路	路	九	紳	ほ	雨		古	
期	天	魔		簪							樓				魚	

石宮西後松春須妹吉市村姫水北米藤岩古前古
曾岡藤い小柳紀豆九満水車裡鐘美郎子郎麗海竹
根白霄兒を太秋満水車裡鐘美郎子郎麗海竹
民白霄兒を太秋満水車裡鐘美郎子郎麗海竹
郎峰兒を太秋満水車裡鐘美郎子郎麗海竹

押佐尾小布北天酒増藤橋平田岩岡岩大丸黒正原中
谷竹崎林施川野井元岡本佐中崎田橋坂尾川本西
た香方燈筑春斗斗翠藝歩平雨松某双形潮紫水史
け附子正舍川巢居風陽瑠造三月代人虎水花香客風む
を子金川巢居風陽瑠造三月代人虎水花香客風む

大森濱多中西清清石松清岩魚薊杉好濱中田櫻多西關
 森田田內水水野井水本雀住澤原大崎田原中川田尾根
 風市翠白柳史秀友友滿小砥申久銑風不一山
 來宗賢愁芳水子路雄帆于潮園仙雄人葉水波栗
 子男次多樓芳水子路雄帆于潮園仙雄人葉水波栗

支 部 と 幹 事

光笑會(大阪)	今治支部(今治)	城南支部(大阪)	西條支部(愛媛)	大鐵局支部(大阪)	松江支部(松江)	御池橋支部(大阪)	鶴町支部(大阪)	天王寺支部(大阪)	松山支部(松山)	鳥取支部(鳥取)	鏡川支部(島根)	梅田支部(大阪)	函館支部(函館)	道頓堀支部(大阪)
里十九	文庫	申仙	英賀夫	水客	山川兒	いわを	双虎	八九滿	蛇之鷹	鐵州	緣之助	鮎美	晟修	萬よし
尼崎支部(尼崎)	岡山支部(岡山)	堺支部(堺)	布哇支部(布哇)	四ツ橋支部(大阪)	鐵道病院支部(大阪)	葉櫻支部(大阪)	上海支部(中華)	蒙疆支部(張家口)	北鮮支部(清津府)	下關支部(下關)	豐中支部(豐中)	名古屋支部(名古屋)	廣島支部(廣島)	竹原支部(廣島)
美知夫	九坡	銃人	覽花麗	翠芳	春里	秀溪	天作	柳路	笑榮	半休	紫香	水車	風來子	芳郎

菊正宗



店商納嘉本 會社株式

ガラス壺代用紙容器

金屬代用紙罐

紙コップ



丸形・角形・小判形・組立式各種
薬品・食料品・菓子等の容器として最適

地番〇四目丁一通明暗區吉住市阪大

商店葉屋二

番二〇三四 我
番四〇一四屋茶下天 用所務事話電

あ産

めのた

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の収
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

片瀬醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査



片瀬醫學博士

「安産のために」冊子呈上

ワダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

髪のは
げに日本
の姿なり



フケ・カユミを止め白髪・若禿
を防ぎ明朗な青年美を創る

ドーマホ椿豆伊

罐本油香椿豆伊

園芳彩楓大

SENRYU ZASSHI

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大正十三年三月三號三號郵便物認可(毎月一日發行)
昭和十五年十月廿五日印刷本昭和十五年十一月一日發行

川柳雜誌

NO. 202

定價金 30 錢

送料壹錢

りとびきに

美^び顏^が水^す

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！
然ういふ時にも不思議なほどよく効きま
すので、殊に小さいお子方のある御家庭
などには殊の外重寶がられてゐます。
▲ニキビ吹出物に非常によく効くの
で大評判の薬です。ニキビや吹出物
でお困りの方に大きな喜びの糧^{かた}と
してお勧めしたい薬です！
▲定價 一匁四十銭・六十銭・一匁廿五銭・全國藥店にあり

ニキビ

ゼ	吹 ^ふ	ニ
ヒ	出 ^で	キ
此 ^こ	物 ^ぶ	ビ
藥 ^{くすり}	に	・

阪大・京東
館天順谷桃